中学生による地域活動及び公民館事業への参画について（答申）

平 成 ２ ４ 年 ２ 月 ８ 日

壬生町社会教育委員の会議

◇目　次 ―――――――――――――――――――――――――――― P. 1
◇はじめに ―――――――――――――――――――――――――――― P. 4
◇第１章　調査研究の結果 ―――――――――――――――――――――― P. 6
第１節　中学生を取り巻く地域の実態 ―――――――――――――― P. 7
１－１　近所に住む住民との交流について ---------- P. 7
１－２　地域の教育力の低下について ---------- P. 8
１－３　近所の人とのかかわりについて ---------- P. 9
１－４　自治会における地域活動について ---------- P. 10
1-4-1　行事の内容 ---------- P. 10
1-4-2　中学生が参加している行事 ---- P. 11
１－５　子ども会育成会活動における地域活動について ---- P. 12
1-5-1　活動内容 ---------- P. 12
1-5-2　活動内容の決定者 ---------- P. 13
1-5-3　会員の構成 ---------- P. 14
1-5-4　子ども会育成会行事への、中学生の参加状況 ---------- P. 15
第２節　中学生の生活の実態 ―――――――――――――――――― P. 16
２－１　中学生の自由時間について ---------- P. 16
２－２　部活動のない放課後・休日の過ごし方について --- P. 17
２－３　町内中学校における部活動加入率について ----- P. 18
第３節　地域行事への参加及び意識の実態 ―――――――――――― P. 19
３－１　地域行事への参加について ---------- P. 19
３－２　参加している地域行事の内容について ---------- P. 20
３－３　「中学生は地域行事に参加しない」という指摘について ---------- P. 21
３－４　地域行事に参加する小学生と中学生の比較について P. 22
３－５　地域行事へ参加しなくなる原因について -------- P. 23
３－６　地域行事へ参加することへの保護者の意識について P. 24
第４節　公民館事業への参加及び意識の実態 ―――――――――――― P. 25
４－１　公民館利用の程度について ---------- P. 25
４－２　公民館利用の目的について ---------- P. 26
４－３　公民館でどのような活動を望んでいるか -------- P. 27
４－４　地域住民による公民館の利用状況について ----- P. 29
第５節　地域活動及び公民館事業を活性化するためのアイディア ――― P. 30
５－１　中学生の意見 ---------- P. 30
５－２　保護者の意見 ---------- P. 32

◇第２章　調査研究結果を受けての提言並びに方策 ―――――――――――― P.35
第１節　既存の組織・行事へのはたらきかけ ―――――――――――― P.36
【提言１】既存の組織・行事を生かし、つながり・絆づくりに取り組もう。
■方策　１　住民同士の交流が、中学生を含めた世代間交流という形で行われるよう、既存の各組織にはたらきかける。 -------- P.37
■方策　２　既存の各組織に対して、中学生を受け入れてもらえる体制づくりをはたらきかける。 ---------- P.37
■方策　３　中学生が、町内で既に行われている各種行事の運営スタッフとして活動できるようにする。 ---------- P.37
■方策　４　既存の各組織が集い、中学生の地域活動への参画をどう促していくかについて自由に意見を交わせたり情報交換をしたりできる機会を設ける。 ---------- P.37
第２節　大人へのはたらきかけ（中学生を受け入れる地域の体制づくり） ―― P.41
【提言２】中学生を信じてまかせる姿勢の大切さを大人全体で共有しよう。
■方策　５　地域行事を行うときに、中学生に直接声をかけたり募集したりして、組織（企画委員会、運営委員会、実行委員会等）のメンバーに加える。 ---------- P.42
■方策　６　中学生には大人にはない豊かで自由な発想がある。大人だけで活動内容等を決めようとせず、中学生の意見に耳を傾け、中学生が何に興味・関心をもっているのかニーズを把握する。 ---------- P.42
■方策　７　「活動してくれてありがとう」「君のおかげだよ」と中学生に温かなメッセージを送る。 ---------- P.43
■方策　８　「失敗してもいいんだよ」「君にまかせたよ」と、失敗に対して寛容な姿勢で接する。 ---------- P.43
■方策　９　中学生に、小学生に対するリーダー（先輩）としての役割を与えていく。 ---------- P.43
■方策１０　地域行事の予定や情報を家庭や学校へ連絡し、家庭・学校・地域で共有し合う。 ---------- P.44
■方策１１　「地域を基盤にする組織や行事は、学校や家庭などと同様に大切な居場所である」という認識を深める。 ---------- P.44
■方策１２　大人自身が地域活動を楽しんでいる姿を、中学生が目にできるようにする。 ---------- P.44
■方策１３　いろいろな価値観・人生観をもつ地域の人と一緒に行動することの素晴らしさへの理解を深め、積極的に我が子を地域活動へ送り出す。 ---------- P.44
■方策１４　中学生は、壬生町の次世代の担い手である、という認識を深める。 ---------- P.45
■方策１５　保護者自身、地域行事に積極的に参加するようにする。---- P.45
■方策１６　中学生の活動が、学校の勉強や部活動ばかりに偏ることがないよう、地域の関係機関等との協働を深め、中学生が多様な活動に取り組める機会を与える。 ---------- P.45
■方策１７　地域で行われる様々な催しに、部活動や学級、委員会等を単位として参加し、生徒が活躍できるようにする。 ------- P.45
■方策１８　地域行事での中学生の活躍を、学校・学級における様々な機会（全校朝会、朝の会、帰りの会、道徳の時間、学級活動の時間等）で認めたり褒めたりする。 ---------- P.45
■方策１９　地域活動に参加した中学生の活動実績を評価し、「やってよかった」という達成感が記録として残るように、ポイントカードを作成する。 ---------- P.46
■方策２０　各組織と学校が連携・協力しあえるよう、連絡・調整のための機能（コーディネート機能）を充実させる。---------- P.46

第３節　中学生へのはたらきかけ（次世代の地域の担い手の育成） ――― **P.47**

【提言３】地域活動の魅力を中学生に発信し、興味･関心を高めていこう。

■方策２１　地域行事の予定や実行委員の募集に関する情報を、様々な媒体（チラシ・ポスター・ホームページ等）を通じて事前に中学生へ知らせ、参加を呼びかける。 ---------- P.48

■方策２２　部活動の行われない曜日･時間を活用して地域貢献活動等に励めるよう、どんな地域貢献活動（ボランティア活動）が可能か、中学生に提示する。 ---------- P.48

■方策２３　地域活動に興味・関心のある中学生を募り、実行委員会を組織する。公民館長や社会教育委員などが、中学生の地域活動を支援していく。 ---------- P.48

■方策２４　直接声をかけ、地域は中学生の力を必要としていることを伝える。 ---------- P.48

第４節　公民館の機能を高めるためのはたらきかけ ――― **P.49**

【提言４】学びの場、活動・交流の場としての公民館機能を充実させていこう。

■方策２５　公民館活動を活性化するために、減免制度や休館日等について定めた公民館使用条例や施行規則等を改正する。 P.50

■方策２６　中学生を対象とした講座を、中学生の興味・関心に基づいて企画する。 ---------- P.50

■方策２７　いろいろな公民館事業を支援する“運営補助ボランティア”として中学生が活動できるようにする。 ---------- P.50

■方策２８　人々が気軽に集い、談笑し、同世代の人たちや異世代の人たちとつながり合えるような居場所機能（例えば交流コーナー）を備える。 ---------- P.50

◇結びに ――― **P.51**

◇参考資料 ――― **P.52**

資料１　関係法令・答申等における社会教育の動向 ――― **P.53**

１－１　教育基本法の改正 ---------- P.53

１－２　中央教育審議会の審議 ---------- P.54

１－３　栃木県社会教育委員会議の答申・報告（２９期・３０期） ---- P.55

１－４　栃木県生涯学習推進計画第四期計画「新･とちぎ学びかがやきプラン」 ----- P.56

１－５　とちぎ青少年プラン ---------- P.57

資料２　他市町における先進的な取組事例 ――― **P.58**

２－１　神奈川県真鶴市「中学生ボランティアカード」 --- P.58

２－２　佐賀県武雄市「トムソーヤプラン」 ---------- P.60

２－３　栃木県那須町「子どもフェスティバル実行委員会」 -- P.62

資料３　諮問書 ――― **P.66**

資料４　答申書（概要版） ――― **P.67**

資料５　社会教育委員の会議　協議経過 ――― **P.69**

資料６　社会教育委員の会議　写真記録 ――― **P.70**

資料７　社会教育委員による地域活動（写真記録） ――― **P.71**

資料８　調査研究結果（調査用紙） ――― **P.73**

資料９　平成２３・２４年度壬生町社会教育委員名簿 ――― **P.81**

はじめに

―――社会に居場所がない―――　地域社会のあり方が急速に変化する中、“無縁”となる人たちが高齢者だけでなく、すさまじい勢いで低年齢化しています。平成２２年１月放送のＮＨＫ総合テレビ「無縁社会」では、多くの人が家庭・地域・職場等で居場所を失い、自分の存在意義に戸惑い、何のために生きているのかと追いつめられていく深刻な状況が示され、大きな反響を呼びました。

そんな折、平成２３年３月１１日午後２時４６分、未曾有の出来事――東日本大震災――が起こりました。多くの貴い命が失われ、また、「幸せになろう」と思って築きあげてきた多くのものが一瞬にして瓦礫となってしまいました。これまであたりまえだった日常、そして積み上げてきた価値観までもが、大きな音をたてて崩れ去りました。この震災をとおして、今、私たちの地域社会に必要なものは、モノや名声などではなく、命や愛情、さらにはあたたかなつながりや絆であることが改めて浮き彫りとなりました。モノの豊かさが指標だった時代に終止符が打たれた、と言えるでしょう。「ソーシャル・キャピタル（つながっていること自体に大きな価値をおく）」という考え方も、震災以前に比べてより重視されるようになっています。そんな状況の下、人々が多様につながりあえる地域社会の創出が、社会教育に求められています。

この度の諮問テーマは、こうした今日的課題にぴったりと合致します。この度の諮問は、次世代の担い手である中学生と地域の大人のつながりを地域内にどう構築していくかを考える上で、たいへんよい契機となりました。全５回開催された会議と全２回開催された調査研究部会の席上で、委員各位による熱い議論が展開されました。

「中学生は学校の勉強や部活動で多忙である」とか「中学生を地域活動に参画させるのは難しいだろう」という意見も聞こえてきます。確かに、子どもの「生きる力」を育む上で学校における勉強や部活動は重要な役割を果たしていますし、それを育む最も重要な基盤は家庭教育や学校教育です。このことに異論の余地はありません。しかしながら「生きる力」の育成は、家庭教育や学校教育で完結するものではなく、実社会における多様な経験―――異なる世代の人や他の家庭の人と交流したり、いろいろな価値観・人生観をもつ地域社会の人と一緒に行動したりする経験―――と相まって育まれ伸長していくものです。地域社会には、家庭や学校と教育責任を分担しながら、子どもたちの発達段階に応じた多様な経験を提供していく役割が期待されています。大切なことは、子どもたちの経験が勉強や部活動だけに偏ることのない“バランス感覚”であると言えるでしょう。

「中学生の地域活動離れ」が指摘されている今日、中学生を地域活動へといざなうことは簡単なことではありません。しかし、どんなに向かい風であっても帆の角度を調節して前に進むヨットの如く、家庭、学校、地域、行政関係者みんなで連携・協力して前進していこうとする姿勢こそが大切だと思います。

作家・故井上ひさし氏は、「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く、面白いことを真面目に、真面目なことを愉快に」という言葉を遺しました。社会教育関係者の間では、中学生の地域活動への参画について考えることは、「たいへん難しいこと」と認識され、議論の俎上に上げることを敬遠してきた傾向も見受けられます。しかしこの「難しいこと」を易しく、しかし深く、面白くそして愉快に協議し、光を見出そうと

試みました。会議のすすめ方にも工夫を凝らし、委員から多様な意見を引き出せるよう、「ワールド・カフェ形式でのグループ協議（少人数で自由に対話し、メンバーの組み合わせや話し合い内容を変えながら、話し合いを発展させていくワークショップ）」も行いました。限られた時間の中でありましたが議論を尽くし、その結果を本答申書にまとめました。

壬生町社会教育委員の会議は、壬生町第５次総合振興計画をもとに、社会とつながる様々な試みを通じて、地域の方々が活躍したりつながりや絆を構築したりしていく処方箋を今後も模索していきたいと考えています。

第１章では、中学生と地域社会とのかかわりの現状や中学生の地域活動の実態に関する調査研究の結果を掲載しました。

第２章では、第１章の調査研究を受けて、中学生の地域活動への参画や公民館事業への参画を促すための提言を試み、いくつかの具体的方策を示しました。

参考資料には、青少年の地域参画という課題にかかわりのある先進的な取組み事例や関係法令等を取り上げ、掲載しました。

なお、本答申の標題として使用されている「参画」という用語は、近年多くの分野・場面で用いられています。と同時に、多様に解釈されることの多い用語でもあります。似たニュアンスをもつ用語には「参加」「参集」「参与」等があり、これらの用語のもつニュアンスの違いをはじめに確認しておくことは必要でしょう。本答申ではそれぞれの用語を下記のように捕らえて用いていくことにしました。

用語の区別	状　態	求められる主体性
参　集	・単に人々が寄せ集まっていること ・単にその場面に居合わせていること	少ない ↑ ↓ 多　い
参　与	・人が相互にかかわり合いをもちながら、場面をつくりだすこと。	
参　画	・各々が計画・運営の段階から関わり、責任を分担しながら場面をつくりだすこと。	

また、「参加」という用語は、上記の「参集」「参与」「参画」を包括する用語として使用し、主体的であるか否かを問うことなく、「その場にいること」「集団に加わること」という意味で用いていくこととしました。

平成２４年２月８日

壬生町社会教育委員の会議

第１章　調査研究の結果

【調査の概要】

社会教育委員７名で調査研究部会を組織し、研究項目の検討並びに調査研究用紙の作成を行った。調査の対象・回答数等は下記のとおりである。

１　調査の目的

町内中学生の地域活動への参加実態や中学生を取り巻く地域環境を把握し、壬生町社会教育委員の会議における協議のための資料とする。

２　調査研究部会開催日

第１回　平成２３年７月１９日（火）、第２回　平成２３年８月１９日（金）

３　調査実施期日

平成２３年９月１日（木）～９月２１日（火）

４　調査方法

質問紙による自記式調査法（自治会長及び子ども会育成会長への調査用紙の送付及び回収は郵送にて実施。中学生及び保護者への送付・回収は、中学校に依頼。）

５　対象及び回収数（下図参照）

対　象		配布数	回収数	回収率
中学生（壬生中・南犬飼中 各学年各２クラスずつ）	１年生	１３３	１１２	８４．２％
	２年生	１３６	１１８	８６．８％
	３年生	１２９	１００	７７．５％
保護者（壬生中・南犬飼中 各学年各２クラスずつ）	１年生	１３３	１１０	８２．７％
	２年生	１３６	１１６	８５．３％
	３年生	１２９	９８	７６．０％
自治会長		７９	５９	７４．７％
子ども会育成会長		６３	５３	８４．１％

６　先行研究データの引用

国・栃木県・壬生町において過去に実施し、かつ本答申に関連性のある研究結果を、参考データとして本答申に掲載した。

（１）内閣府国民生活局「国民生活選好度調査」
　　→Ｈ１９　全国の１５～８０歳未満の男女３，３８３人

（２）文部科学省「地域の教育力に関する実態調査」
　　→Ｈ１８　全国１０箇所抽出の保護者（小学2年・5年・中学2年）男女２，８５３人

（３）文部科学省「全国学力学習状況調査」（壬生町における調査）
　　→Ｈ１９　町内小学校６年生３２０人
　　→Ｈ２２　町内中学校３年生３０２人

（４）壬生中央公民館「公民館講座受講者アンケート」
　　→Ｈ２３　公民館講座受講者９９人

なお、上記（１）（２）は、我が国における今日の傾向を把握するための全国調査であり、壬生町における状況を正確に反映しているとは限らないことを申し添える。

第１節　中学生を取り巻く地域の実態

１－１　近所に住む住民との交流について

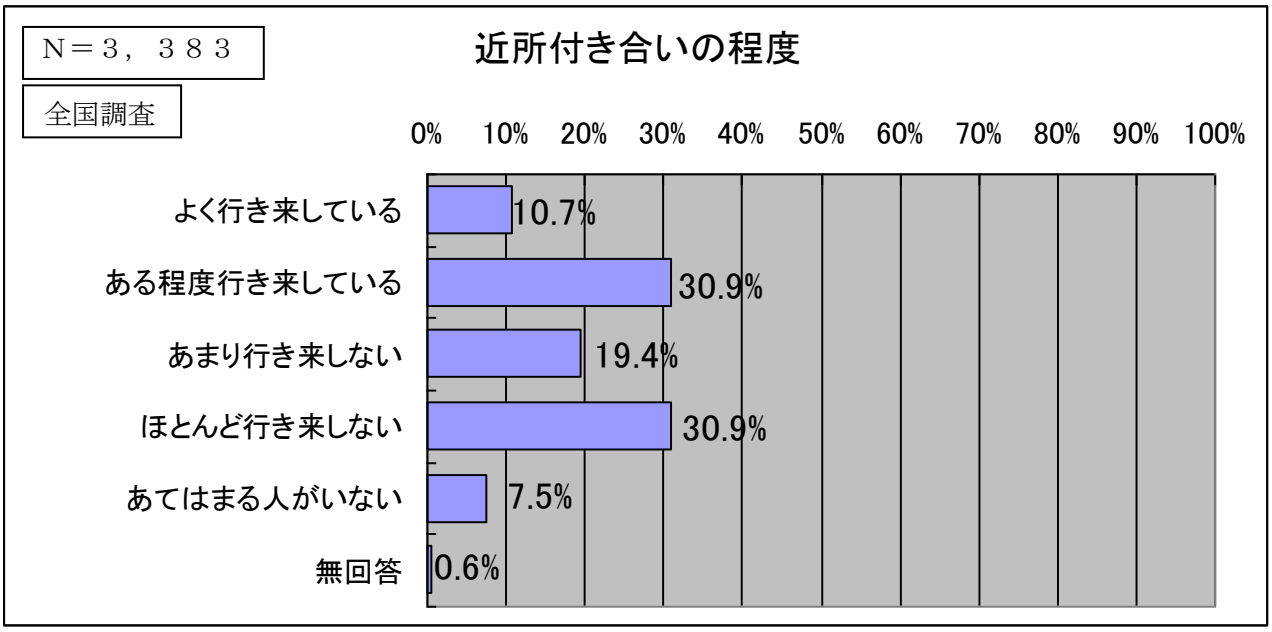
■「近所に住む住民とよく行き来している」と答える人は、約１割に過ぎない。

○内閣府国民生活局が平成１９年に実施した調査では、隣近所の人たちとよく行き来していると回答した人は１０．７％である。

○隣近所の人と行き来することが「ない」と答えた人は、「ほとんどない」「あまりない」併せて５０．３％である。

問　「あなたは現在、隣近所の人たちとどのくらい行き来していますか。」

参考：内閣府「国民生活選好度調査」



※Ｎ（ ＝ Number of cases）は回答者総数（サンプル数）を示す。

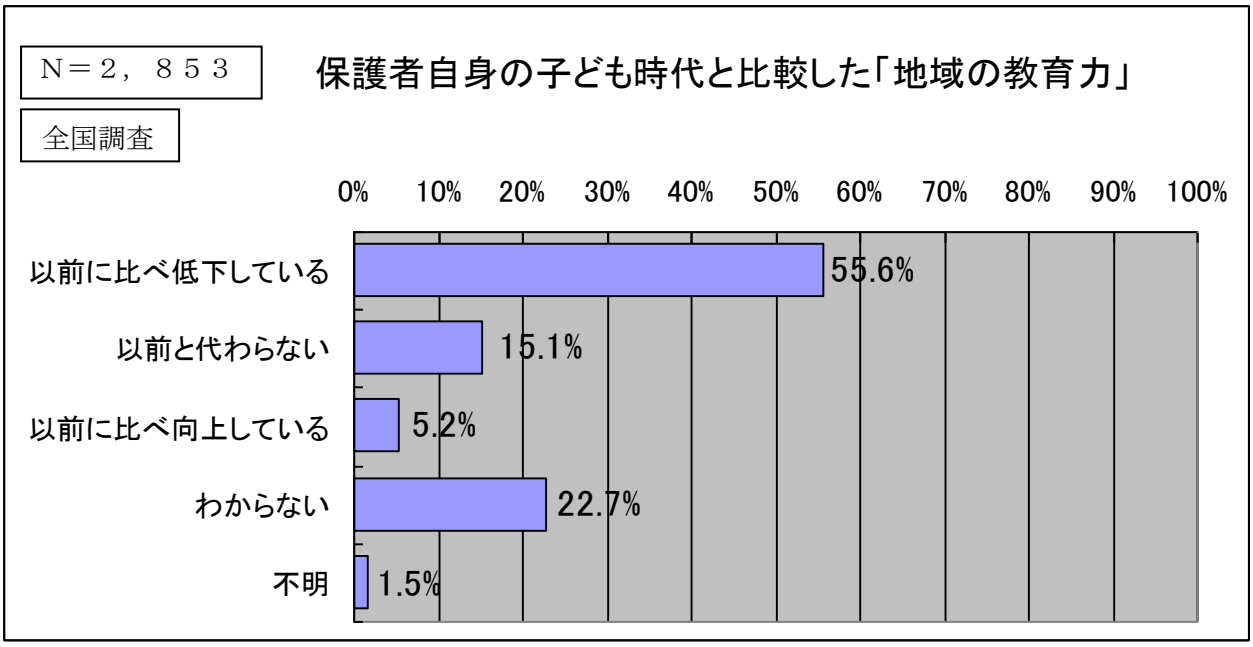
１－２　地域の教育力の低下について

■ 地域の教育力が“以前に比べて低下している”と感じる人は５割を超えている。

○文部科学省が平成１８年に実施した調査では、地域の教育力が「以前に比べて低下している」と答えた人は、５５．６％である。

問　　地域内の子ども、保護者、一般住民が交流などを行うことにより、地域全体で子どもを育て・守る雰囲気やしくみを生み出す「地域の教育力」についてお聞きします。あなたの住んでおられる地域では、「地域の教育力」はご自身の子ども時代と比べてどのような状態にあると思われますか。

参考：文部科学省「地域の教育力に関する実態調査」



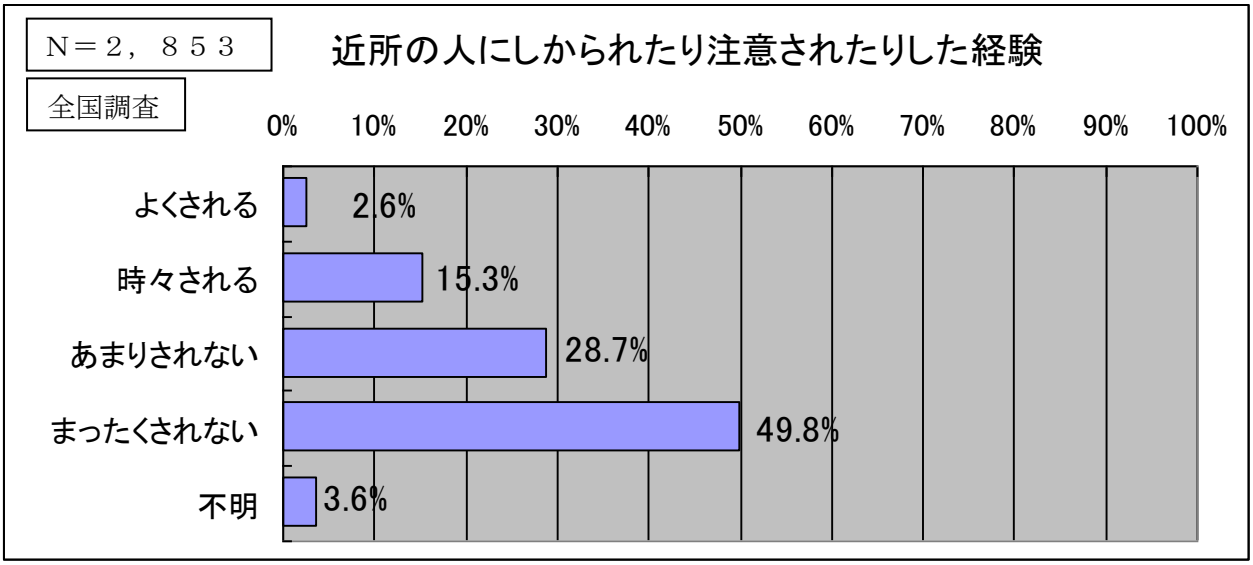
１－３　近所の人とのかかわりについて

■ ７割以上の子どもたちが近所の人にしかられたり遊んでもらったりした経験がない。

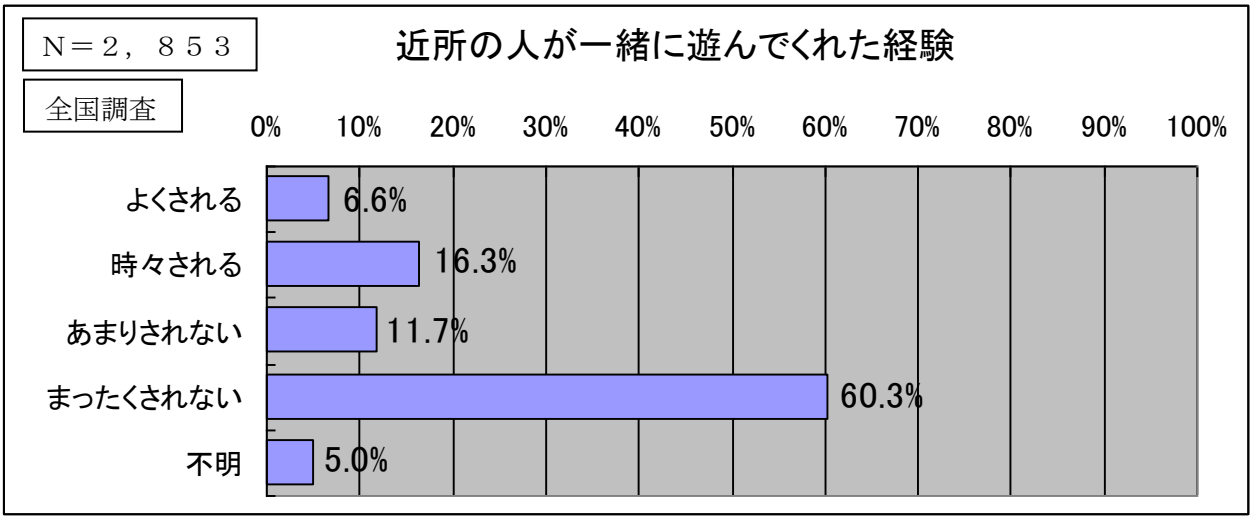
○文部科学省が平成１８年に実施した調査では、近所の人にしかられたり注意されたりした経験が「ない」と答えた子は、「まったくない」「あまりない」併せて７８．５％である。
○近所の人が一緒に遊んでくれた経験が「ない」と答えた子は、「まったくない」「あまりない」併せて７２．０％である。

問　　あなたの家の近くにいるおとなの人たちとのかかわりについておききします。あなたは悪いことをした時、近所の人にしかられたり注意されたり、遊んでもらったりすることがありますか。

参考：文部科学省「地域の教育力に関する実態調査」



参考：文部科学省「地域の教育力に関する実態調査」



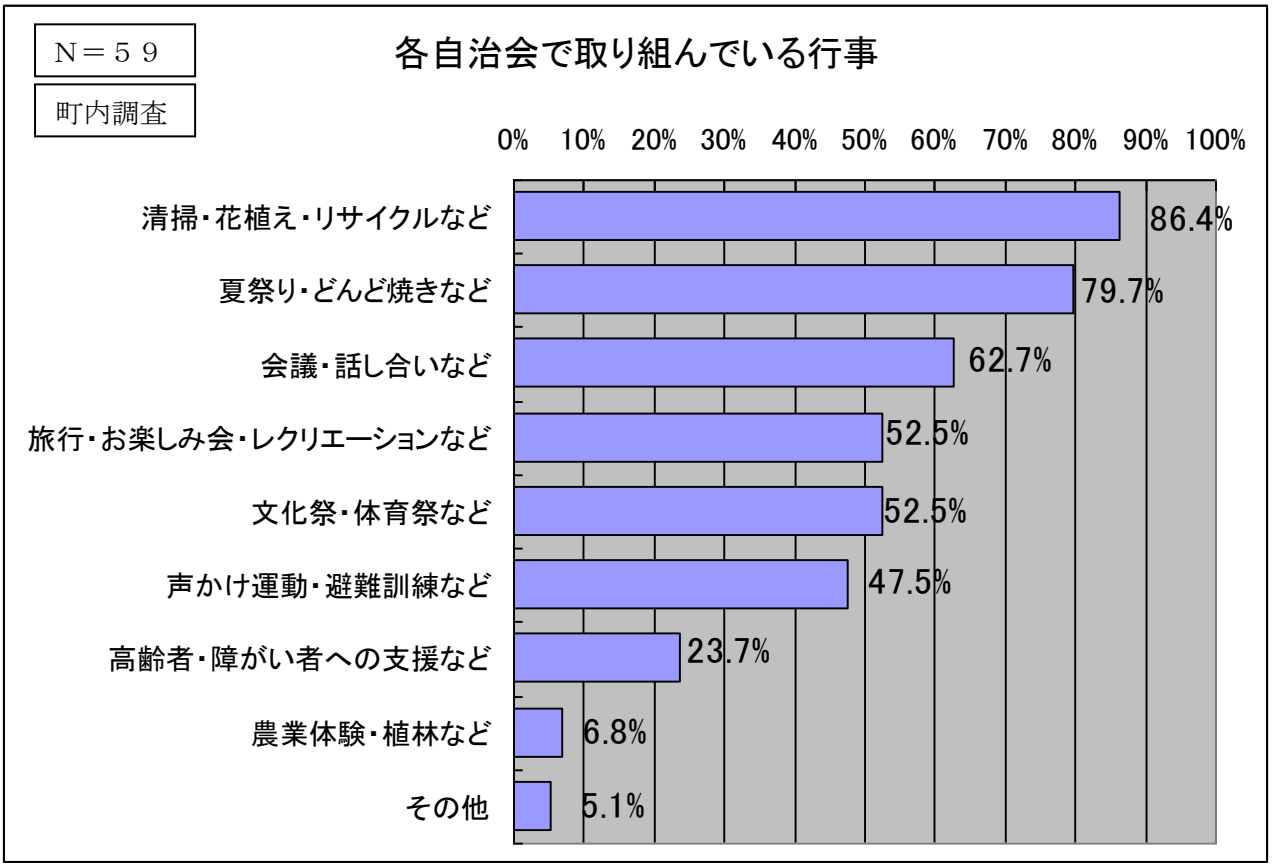
１－４　自治会における地域活動について

１－４－１　行事の内容

■ **町内の自治会で最も盛んに行われている行事は、清掃・花植え・リサイクルなどいわゆる「環境美化活動」型の行事であり、約８割の自治会で行われている。**

○清掃・花植え・リサイクルなど「環境美化活動」が８６．４％と最も多く、次いで、夏祭りやどんど焼きなど「祭り・伝統芸能の継承」の７９．７％、会議・話し合いなど「地域を活性化するための集会」の６２．７％となっている。

問　　あなたの自治会ではどのような行事を行っていますか。（あてはまるものを全て選ぶ。）



【その他の回答】　ＮＰＯ活動

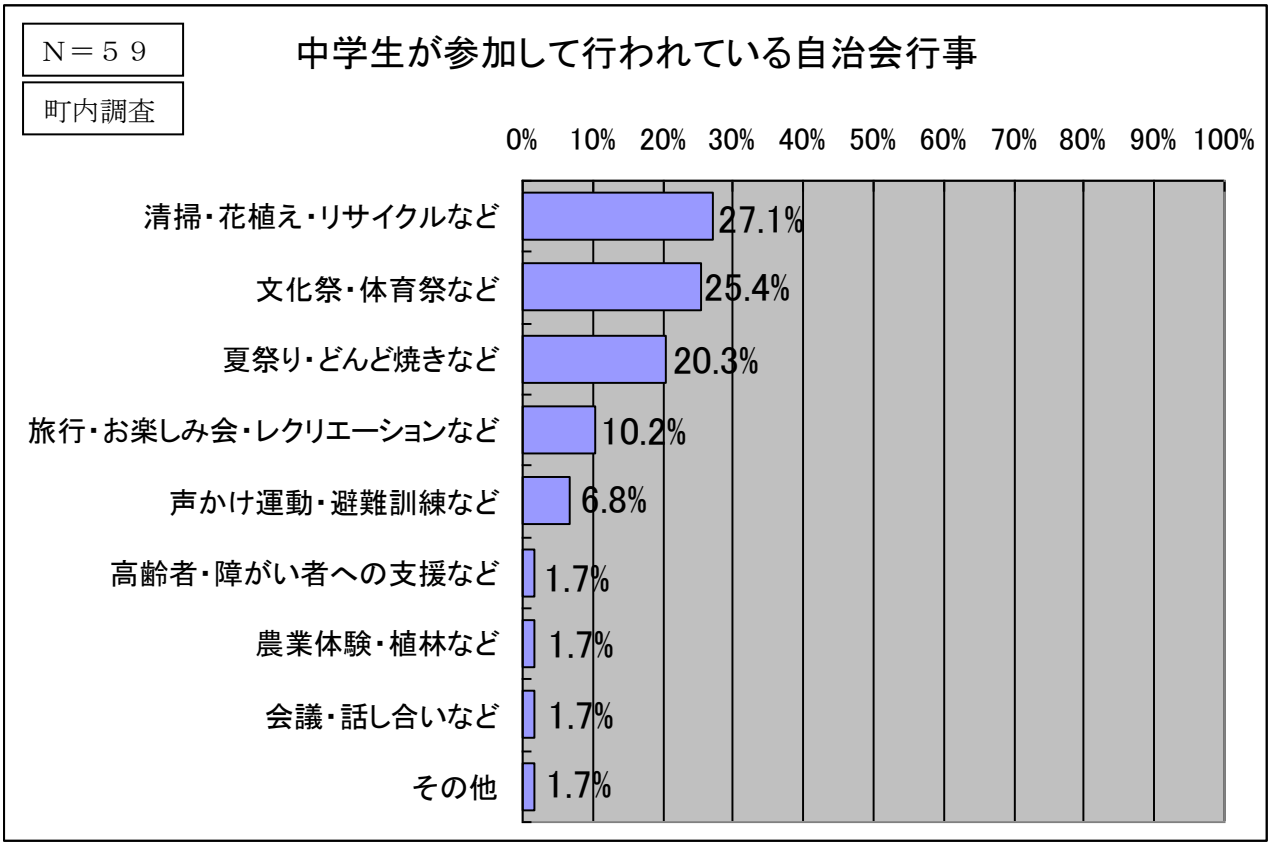
１－４　自治会における地域活動について

１－４－２　中学生が参加している行事

■ **自治会行事に最も多くの中学生が参加しているのは、花植え・リサイクル活動など「環境美化活動」であり、約２割の自治会が行っている。**

○中学生が参加して行われる自治会行事は、清掃・花植え・リサイクル活動など「環境美化活動」が２７．１％と最も多く、次いで、文化祭や体育祭など「芸術文化・スポーツの振興」の２５．４％、夏祭りやどんど焼きなど「祭り・伝統芸能の継承」の２０．３％となっている。

問　　あなたの自治会において、「中学生が参加している行事」はありますか。（あてはまるものを全て選ぶ）



【その他の回答】　蘭学通り祭りへの参加

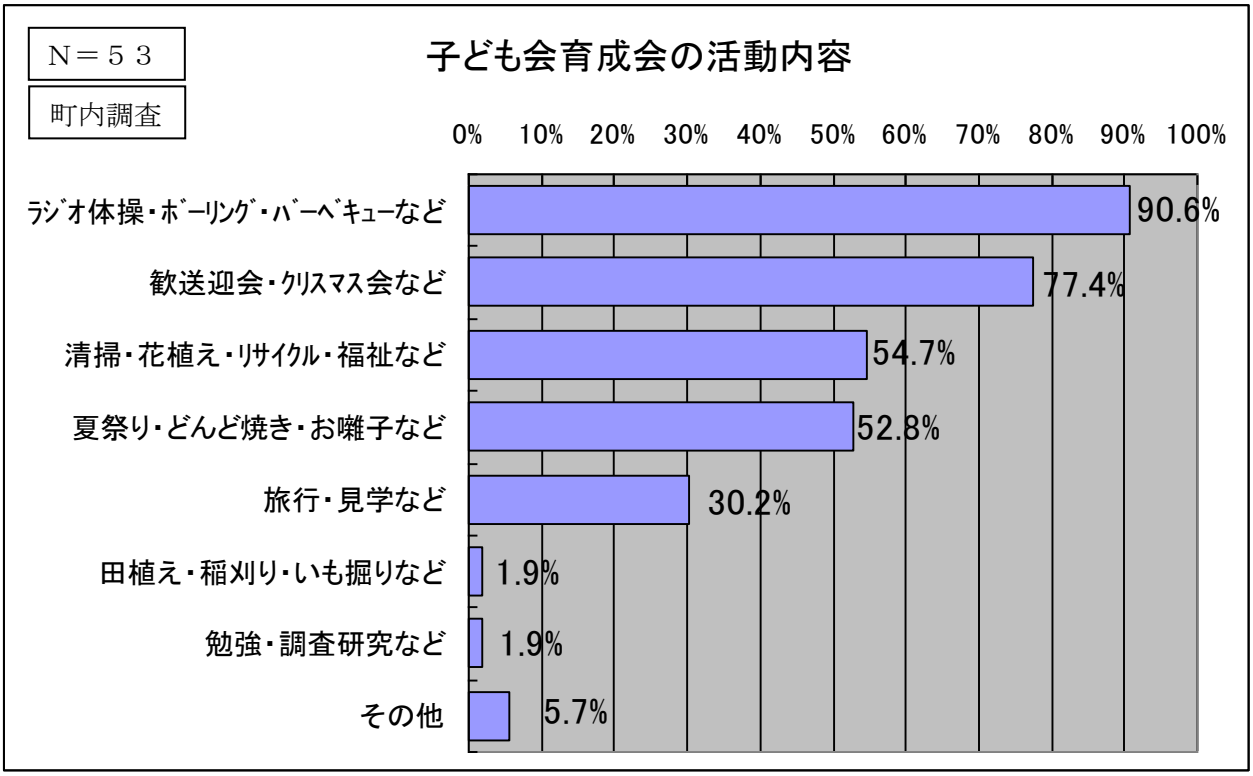
１－５　子ども会育成会における地域活動について

１－５－１　活動内容

■ ９割を超える子ども会育成会で、「スポーツ・レクリエーション」型の地域活動に取り組んでいる。

○ラジオ体操・ボーリング・バーベキューなどいわゆる「スポーツ・レクリエーション」型の活動が９０．６％と最も多かった。次いで、歓送迎会・クリスマス会などいわゆる「お楽しみ会」型の活動が７７．４％、清掃・花植え・リサイクル・福祉活動などいわゆる「奉仕活動」型の活動が５４．７％だった。

問　　あなたの子ども会育成会では、今年度どのような活動を行いますか。（あてはまるものをすべて選ぶ）



【その他の回答】芋煮会
餅つき
ビンゴ大会
ウォークラリー
そば作り体験

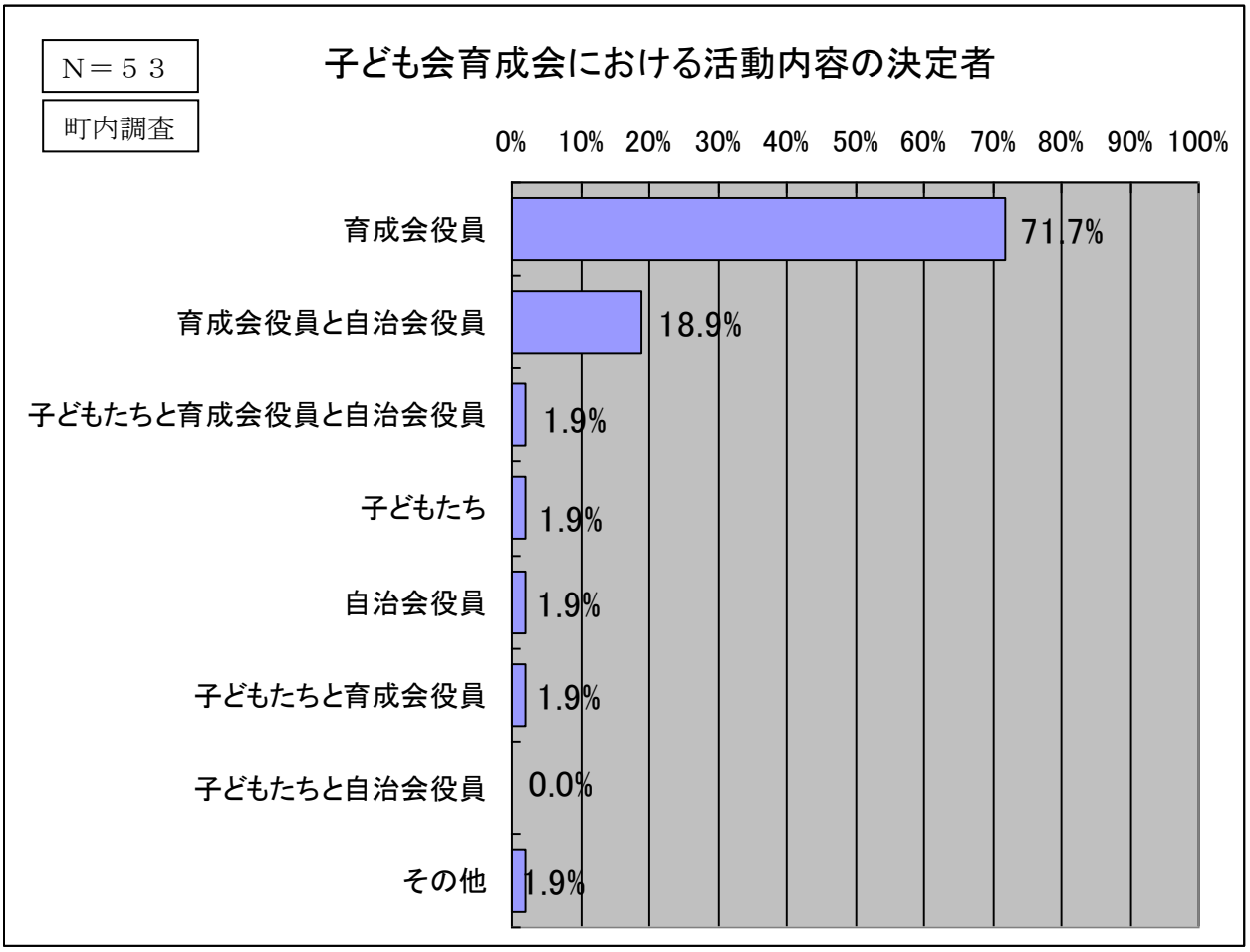
１－５　子ども会育成会における地域活動について

１－５－２　活動内容の決定者

■ ９割以上の育成会では、育成会役員のみの話し合いで活動内容を決定している。

○活動内容を誰が決めているかについて、「育成会役員」が７１．７％と最も多く、次いで「育成会役員と自治会役員」が１８．９％となっている。子どもたちが活動内容の決定に関わっている子ども会育成会は、「子どもたちと育成会役員と自治会役員」の１．９％、「子どもたちと育成会役員」の１．９％、「子どもたち」の１．９％、を合わせた５．７パーセントにすぎない。

問　　活動内容を決めるのは、主に誰ですか。（特にあてはまるものを１つ選ぶ）



【その他の回答】：育成会役員と自治会長

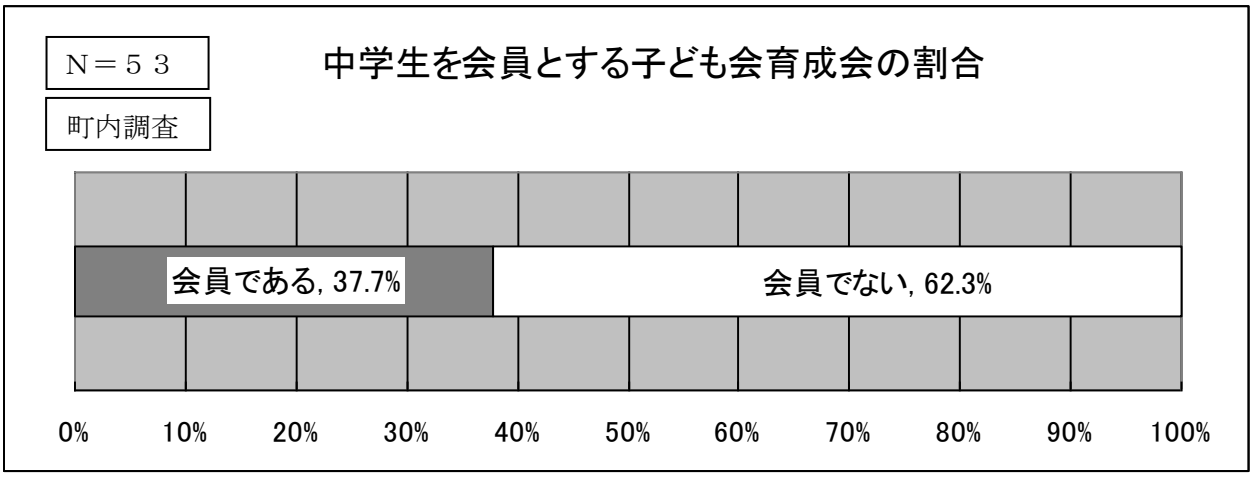
１－５　子ども会育成会における地域活動について

１－５－３　会員の構成

■ **中学生を会員としている子ども会育成会は約４割である。**

○中学生を会員としている子ども会育成会は３７．７％である。

問　　あなたの子ども会育成会では、中学生を「会員」としていますか。なお、本調査でいう「会員」とは、「子ども会育成会の行事に参加してもよい子ども」を指します。会費の支払いの有無などは問いません。

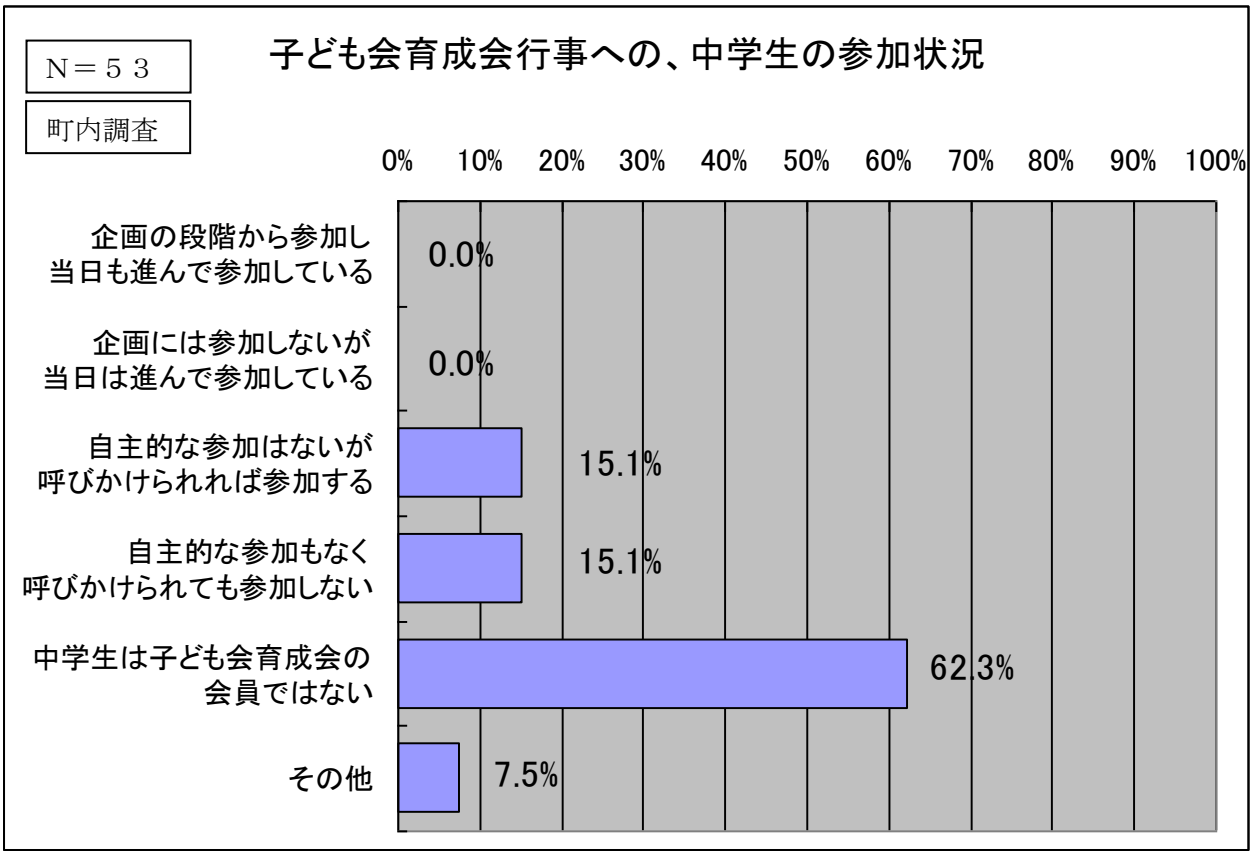


１－５　子ども会育成会における地域活動について
１－５－４　子ども会育成会行事への、中学生の参加状況

■ **自主的な参加はないが、呼びかけられれば参加する中学生がいる子ども会育成会は、２割弱である。**

○企画の段階から参加している中学生（＝参画している中学生）や、当日の行事に進んで参加している中学生はいない。
○中学生の自主的な参加はないものの、呼びかけられれば参加している子ども会育成会は１５．１％となっている。
○中学生の自主的な参加もなく、呼びかけられても参加が見られない子ども会育成会は１５．１％となっている。

問　　子ども会育成会行事への、中学生の参加状況は、概ねどんな様子ですか。（特にあてはまるものを１つ選ぶ）



【その他の回答】：自主的な参加もなく、呼びかけもしていない。
強制参加は促していない。

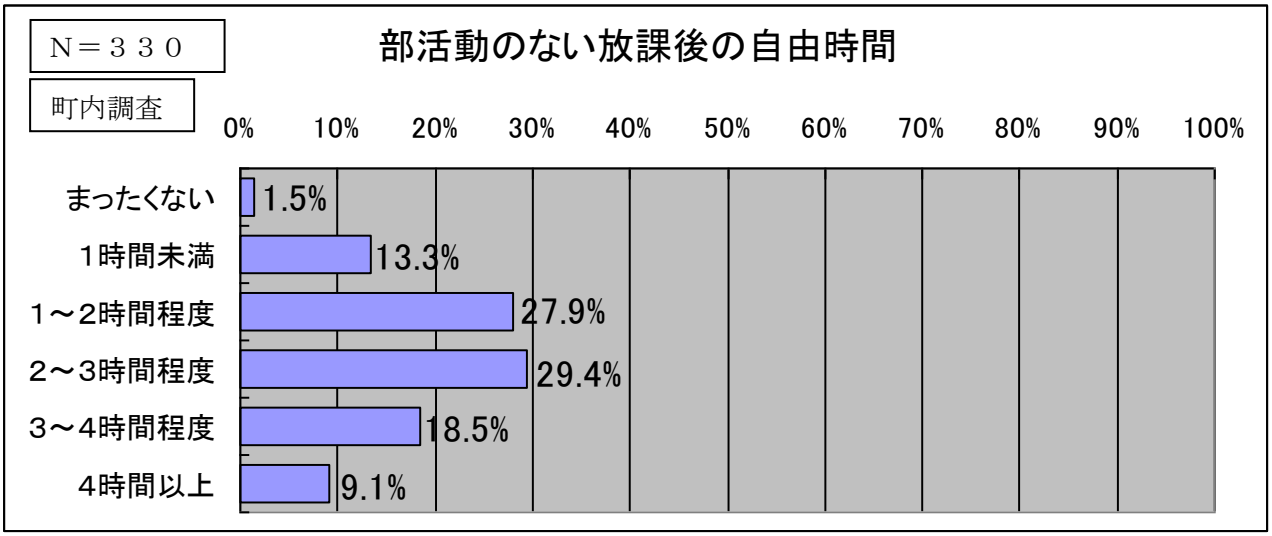
第２節　中学生の生活の実態

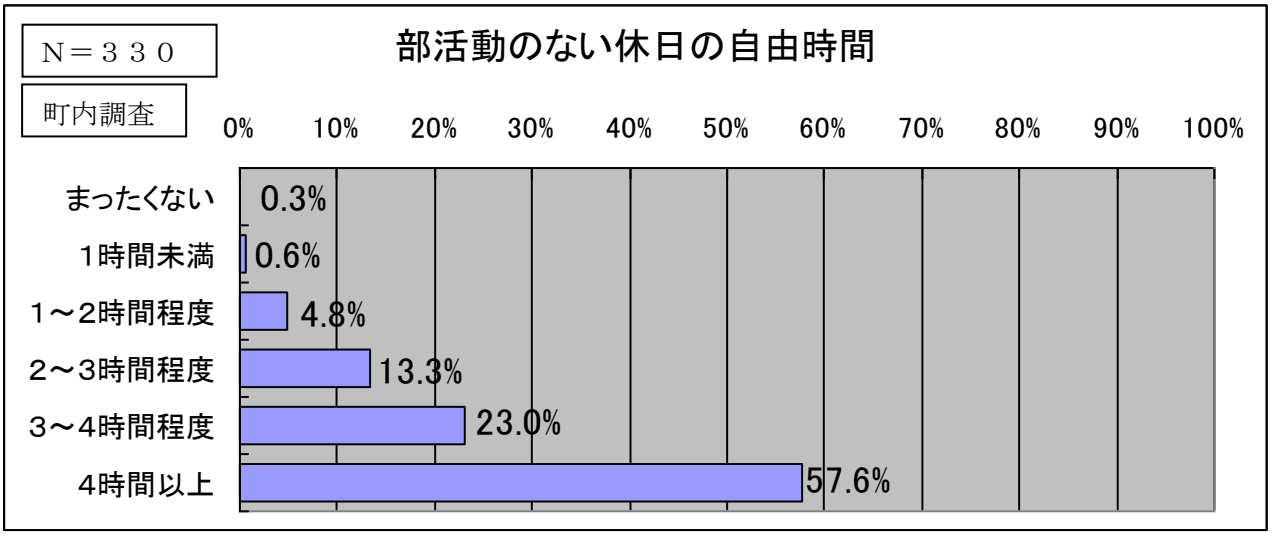
２－１　中学生の自由時間について

■ **平日の自由時間は「２時間～３時間程度」、休日の自由時間は「４時間以上」ある。平日の自由時間が「まったくない」または「１時間未満」と感じている中学生は２割弱である。**

○部活動のない平日の自由時間は、「２時間～３時間程度」が２９．４％と最も多く、次いで、「１時間～２時間程度」が２７．９％となっている。
○部活動のない休日の自由時間は、「４時間以上」との回答が５７．６％と最も多く、次いで「３時間～４時間程度」が２３．０％となっている。
○平日の自由時間が「まったくない」「１時間未満」と回答した中学生は、合わせて１４．８％となっている。

問　　自由時間は、一日の中で何時間くらいありますか。なお本調査でいう自由時間とは、学校・宿題・部活動・塾・習い事以外の時間を指します。（１つずつ選ぶ）



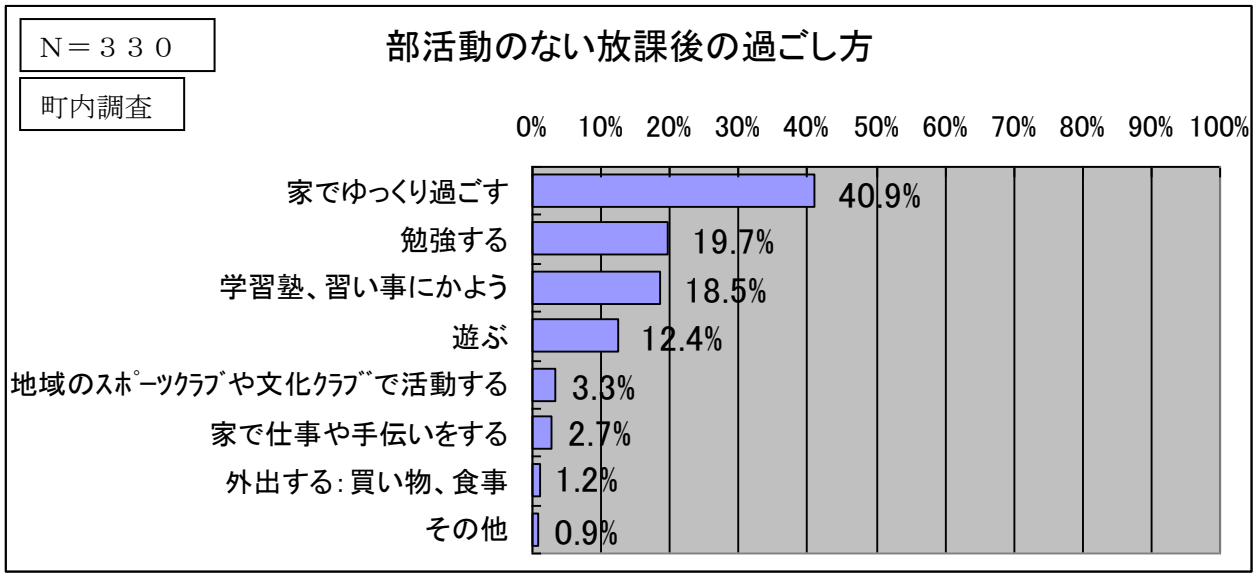


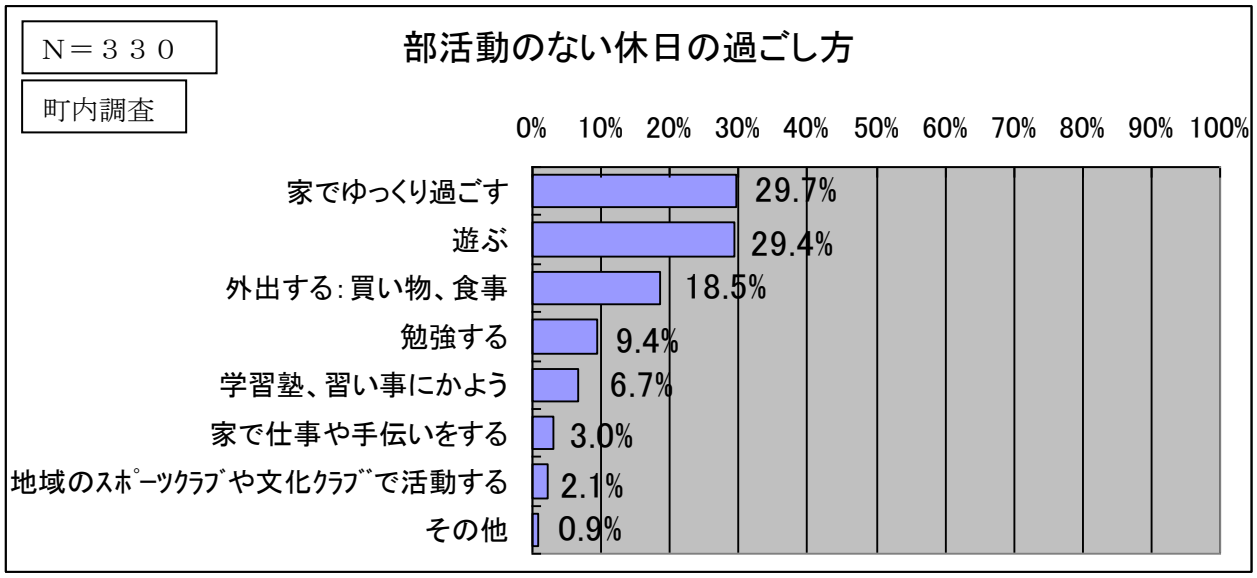
２－２　部活動のない放課後・休日の過ごし方について

■ 部活動のない放課後及び部活動のない休日ともに「家でゆっくり過ごす」が最も多い。

○部活動のない放課後の過ごし方は、「家でゆっくり過ごす」が４０．９％で最も多く、次いで「勉強する」が１９．７％、「学習塾・習い事にかよう」が１８．５％となっている。
○部活動を行わない休日の過ごし方は、「家でゆっくり過ごす」が２９．７％で最も多く、次いで「遊ぶ」が２９．４％、「外出する（買い物・食事等）」が１８．５％となっている。

問　　部活動のない放課後及び部活動のない休日は、何をして過ごすことが一番多いですか。（それぞれ１つずつ選ぶ）

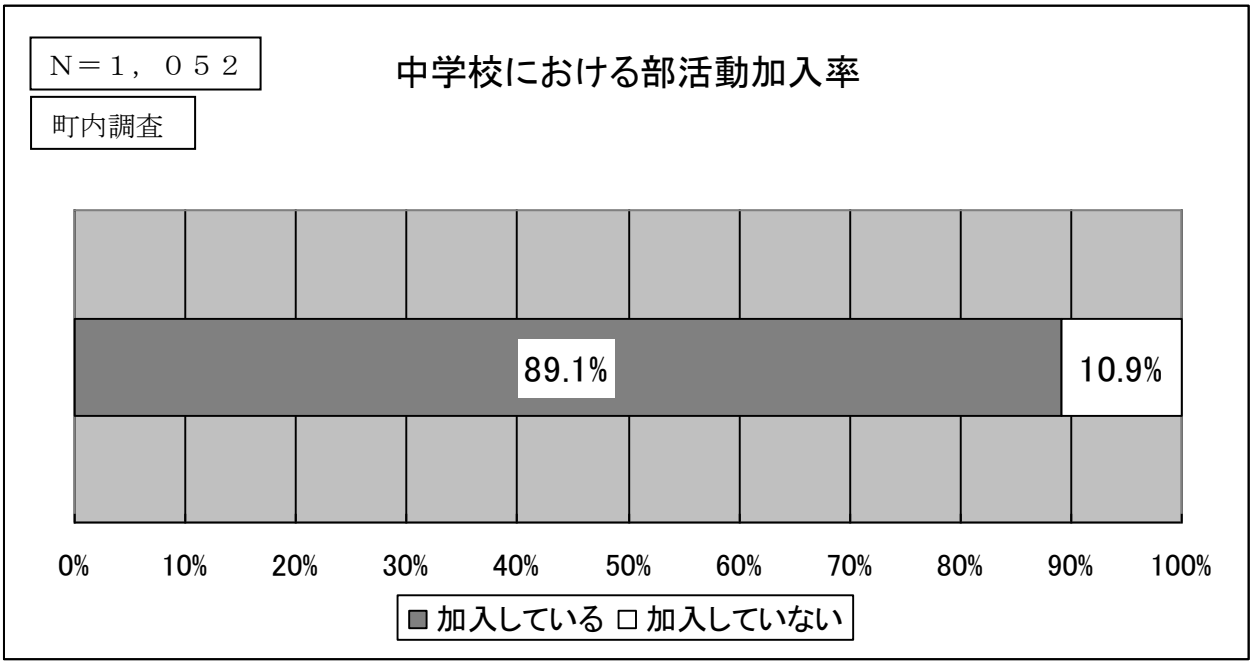




２－３　町内中学校における部活動加入率について

■ 運動部や文化部に加入している中学生は、約９割である。

○平成２３年１０月現在、壬生町内中学校では、８９．１％の中学生が中学校の部活動に加入している。
○ソフトテニス部に所属する生徒が１３２名で最も多く、次いで吹奏楽部の１０３名、バスケットボール部１０２名となっている。



町内中学校部員数内訳（平成２３年１０月２７日現在）

部活動名	部員数
ソフトテニス	132
吹奏楽	103
バスケットボール	102
卓球	90
サッカー	73
美術	67
野球	63

部活動名	部員数
バレーボール	56
剣道	56
バドミントン	33
パソコン	32
陸上	28
科学	26
ソフトボール	14
計	**937**

※　町内中学校生徒数　１，０５２名

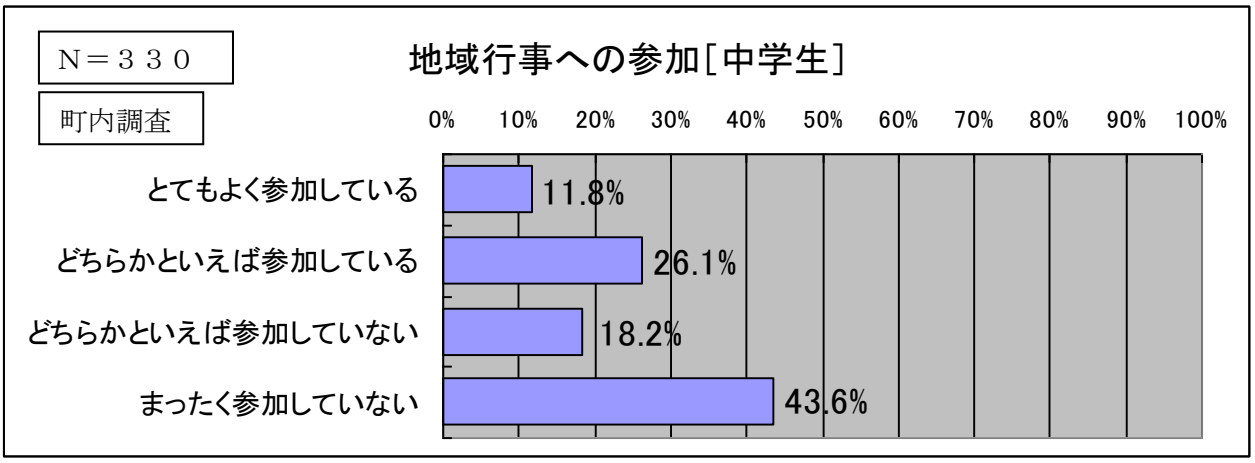
第３節　地域行事への参加及び意識の実態

３－１　地域行事への参加について

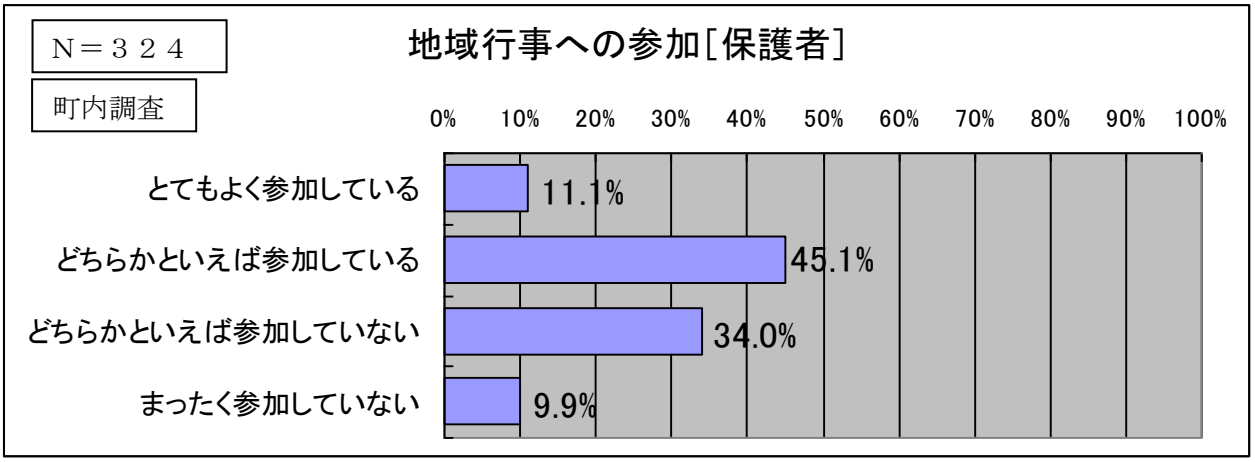
■ 中学生の約４割、保護者の約６割が「地域行事に参加している」と答えている。

○中学生においては、「（とてもよく）（どちらかといえば）参加している」が３７．９％、「（どちらかといえば）（まったく）参加していない」が６１．８％であり、「参加していない」が大幅に上回っている。
○保護者においては、「（とてもよく）（どちらかといえば）参加している」が５６．２％、「（どちらかといえば）（まったく）参加していない」が４３．９％であり、「参加している」が若干上回っている。

問　中学生になってから、今住んでいる地域の行事に参加していますか。（各中学校で実施している「空ﾋﾞﾝﾘｻｲｸﾙ（壬生中）」「廃ﾋﾞﾝ･ﾍﾟｯﾄﾎﾞﾄﾙ回収（南犬飼中）」を除く）



問　あなたは、今住んでいる地域の行事に参加していますか。

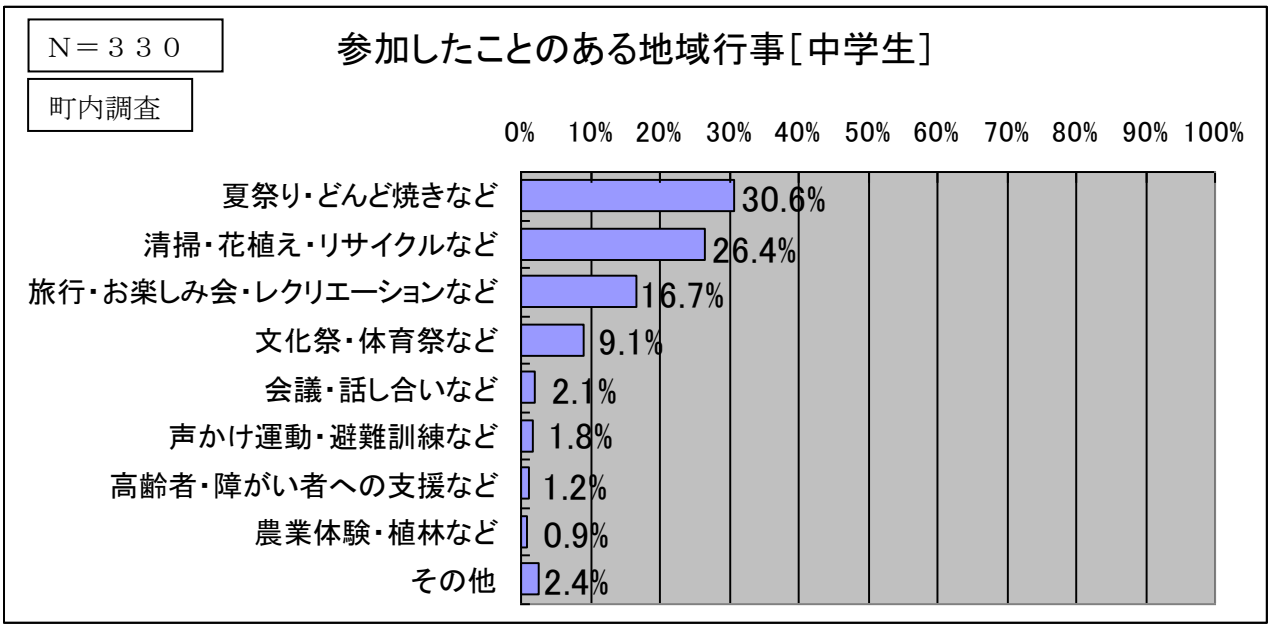


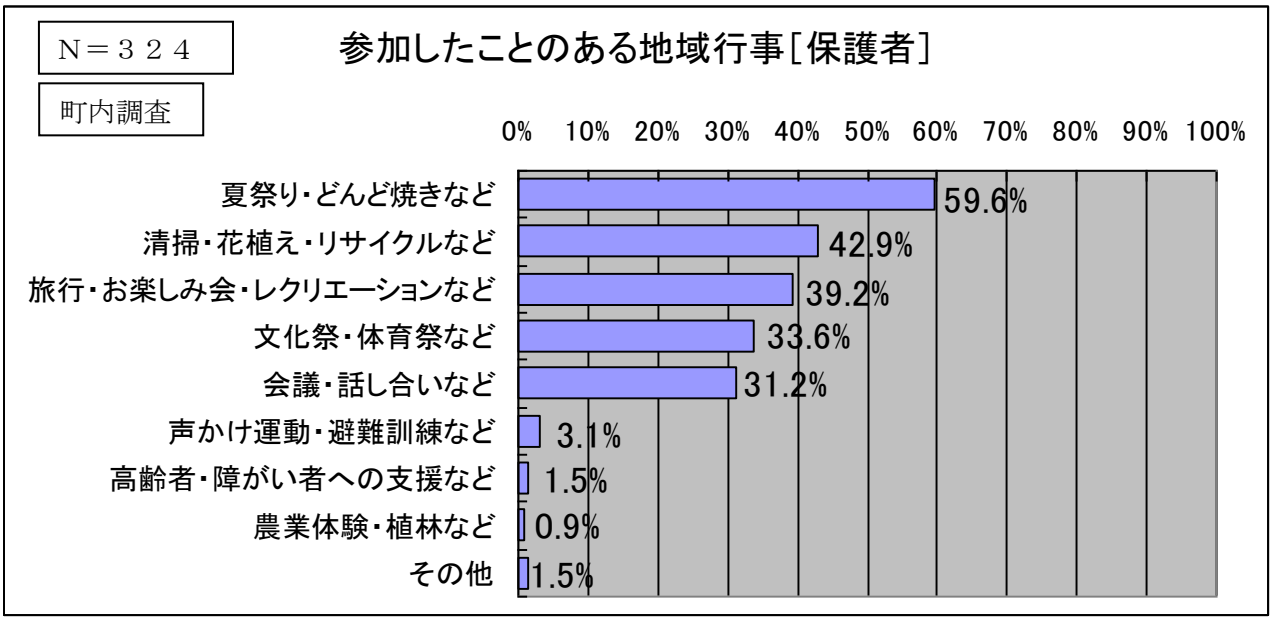
３－２　参加している地域行事の内容について

■ 中学生の３割、保護者の６割が、夏祭りやどんど焼きなど「祭り・伝統芸能の継承」に関する地域行事に参加している。

○中学生・保護者ともに、夏祭りやどんど焼きなど「祭り・伝統芸能の継承」が最も多く、次いで清掃・花植え・リサイクルなど「環境美化活動」、旅行・お楽しみ会・レクリエーションなど「住民どうしの交流」となっている。

問　　あなたはこれまで、今住んでいる地域の、どのような行事に参加したことがありますか。（特にあてはまるものを３つ以内で選ぶ）



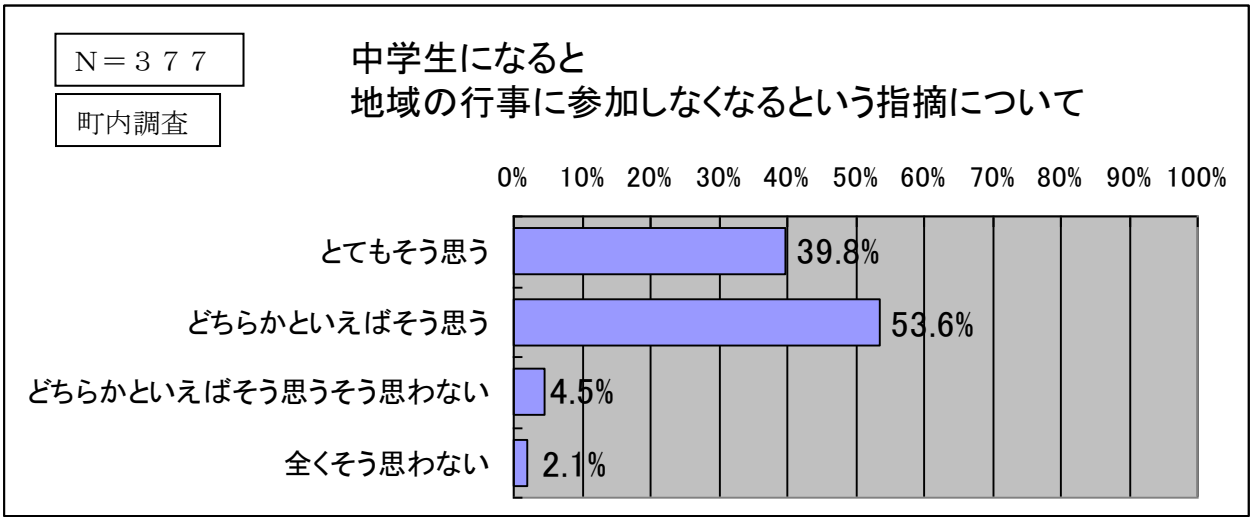


３－３　「中学生は地域行事に参加しない」という指摘について

■ ９割を超える保護者が「中学生になると地域の行事に参加しなくなる」と感じている。

○「とてもそう思う」が３９．８％、「どちらかといえばそう思う」が５３．６％で、合わせて９３．４％の保護者が「中学生になると参加しなくなる」と回答している。

問　「子ども達は、中学生になると、地域の行事に参加しなくなる」という指摘がありますが、あなたはどう思いますか。（１つ選ぶ）



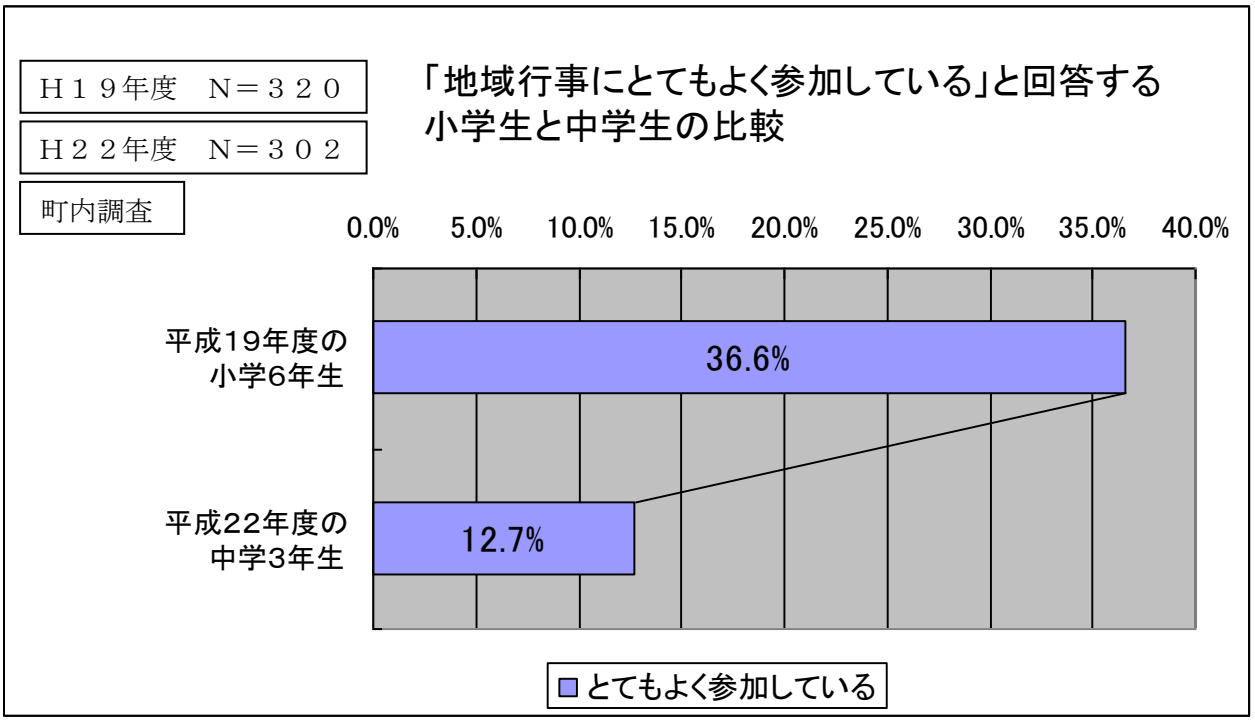
３－４　地域行事に参加する小学生と中学生の比較について

■ 「地域行事にとてもよく参加している」と回答する子どもは、小学生から中学生になると２割以上減少する。

○「地域活動にとてもよく参加している」と回答する子どもは、小学校６年生（平成１９年度）では３６．６％だが、中学３年生（平成２２年）になると１２．７％になり、２３．９％も減少している。

問　　あなたは地域の行事に参加していますか。

参考：文部科学省　「全国学力学習状況調査」

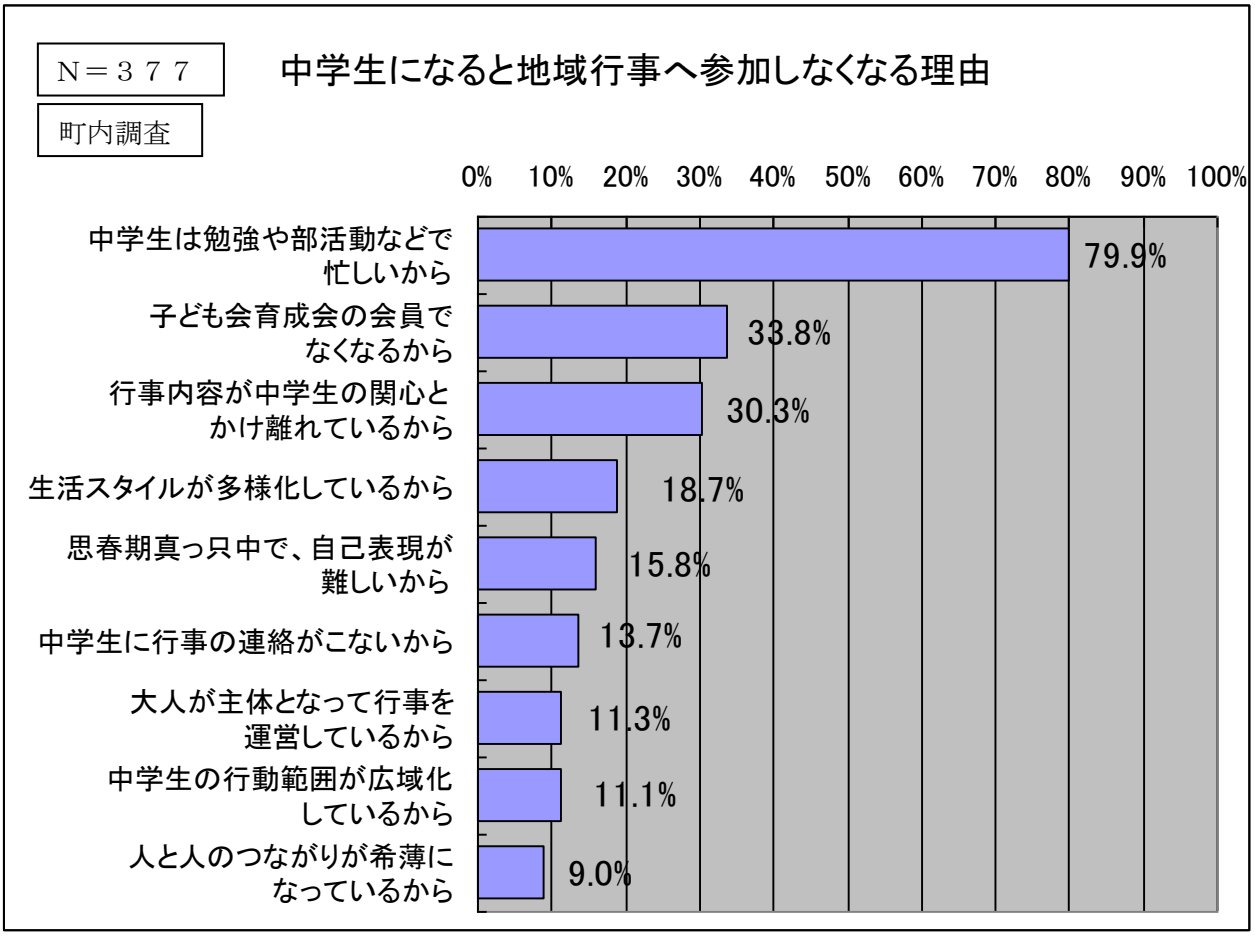


３－５　地域行事へ参加しなくなる原因について

■ **中学生になると地域行事への参加が減少する原因として、８割近い保護者が「勉強や部活動などで忙しい」ことを挙げている。**

○保護者に尋ねた調査では、「勉強や部活動などで忙しいから」という回答が７９．９％で最も多く、次いで「子ども会育成会の会員でなくなるから」が３３．８％、「行事内容が中学生の関心とかけ離れているから」が３０．３％だった。

問　　「中学生になると、地域の行事に参加しなくなる」のはなぜだと思いますか。
（特にあてはまるものを３つ以内で選ぶ）

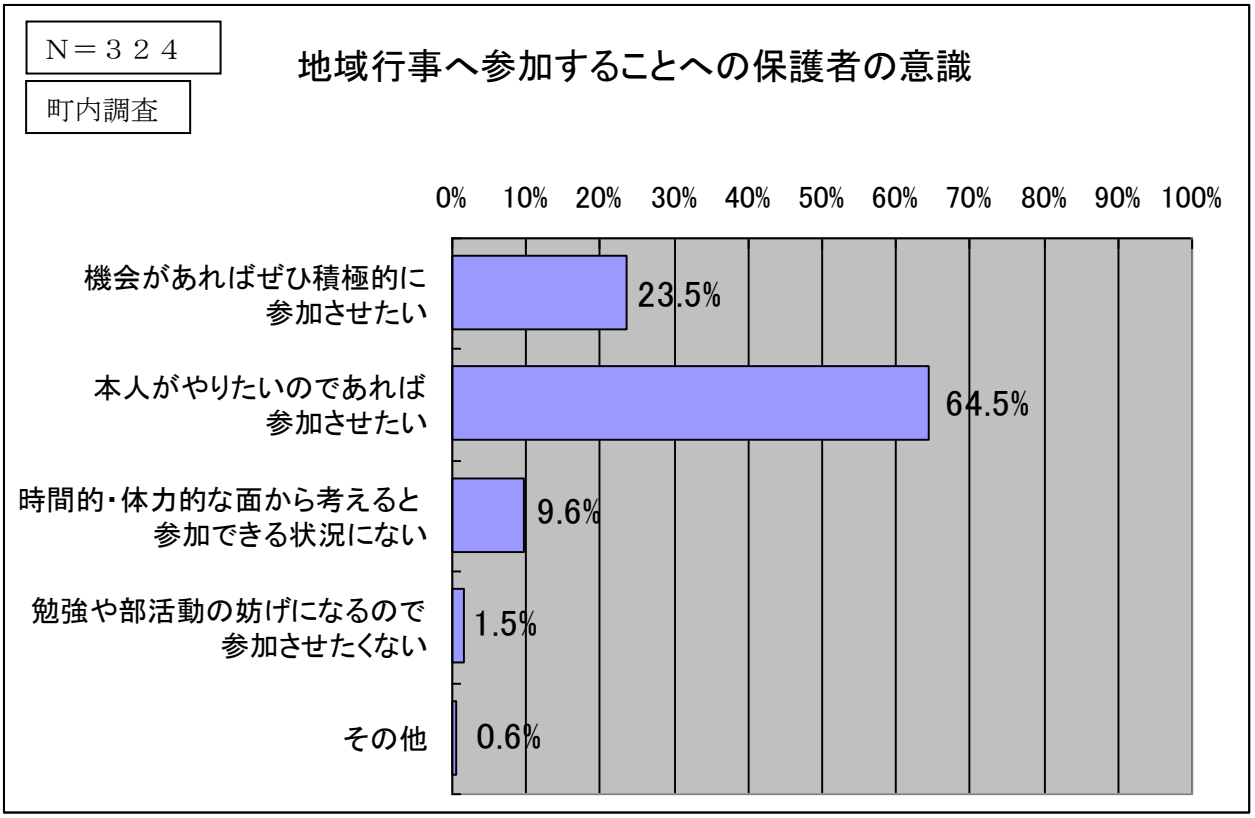


３－６　地域行事へ参加することへの保護者の意識について

■ 「機会があればぜひ積極的に参加させたい」と考えている保護者は約２割である。

○我が子が地域行事に参加することの是非について、中学生の保護者に訊ねた調査では、２３．５％の保護者が「機会があればぜひ積極的に参加させたい」と答えている。

問　　お子様が地域の行事に参加することについて、あなたはどのようにお考えですか。（１つ選ぶ）



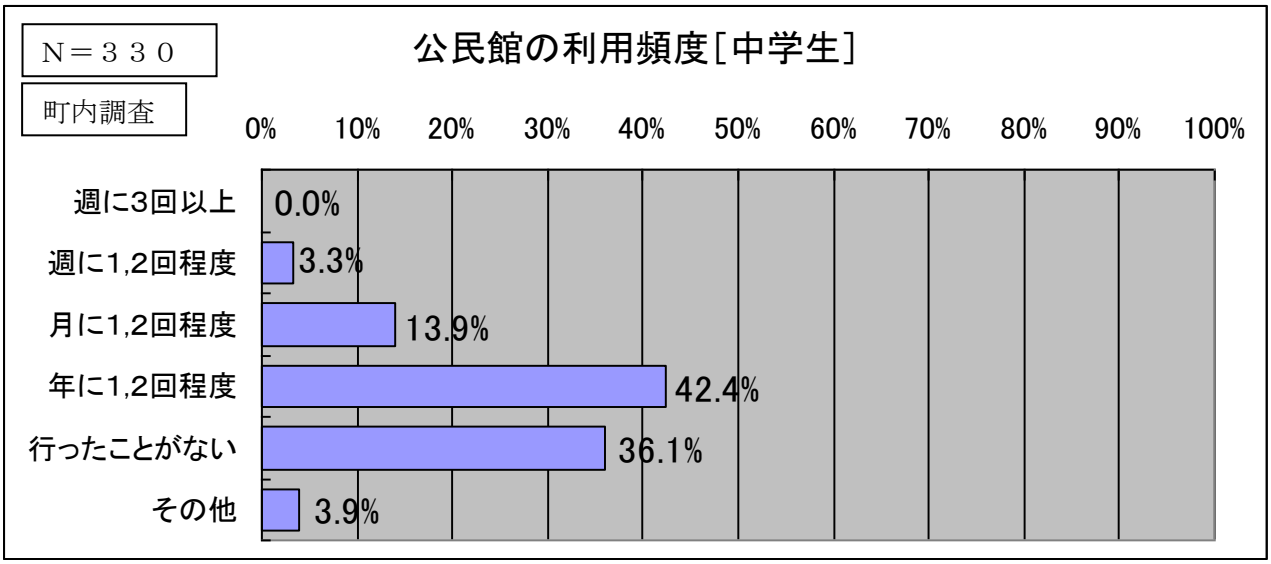
第４節　公民館事業への参加及び意識の実態

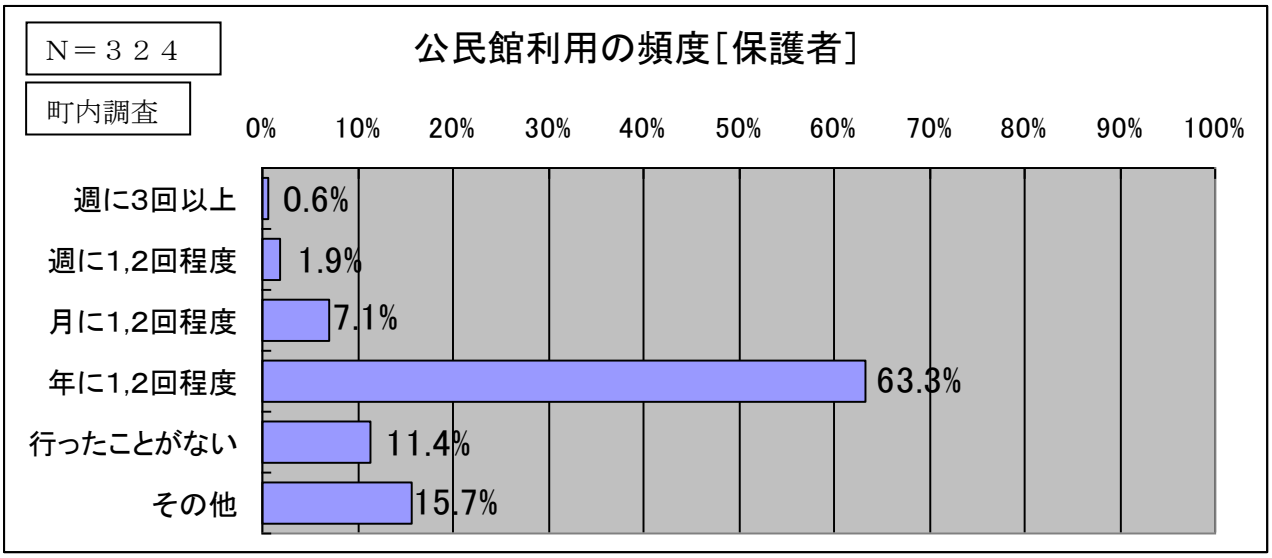
４－１　公民館利用の程度について

■ 中学生の約４割、保護者の約１割が、公民館を利用したことがない。

○公民館を利用する程度について中学生に尋ねた調査では、「年に１～２回程度利用する」が４２．４％で最も多く、次いで「公民館に行ったことがない」の３６．１％だった。
○保護者に尋ねた調査では、「年に１～２回程度利用している」が６３．３％と最も多く、「公民館に行ったことがない」保護者は１１．４％だった。

問　　あなたは公民館を利用する機会はどのくらいありますか。なお、本調査で公民館とは、町の公民館〔中央公民館・南犬飼地区公民館・稲葉地区公民館〕や自治会ごとに設置した公民館を指します。（１つ選ぶ）



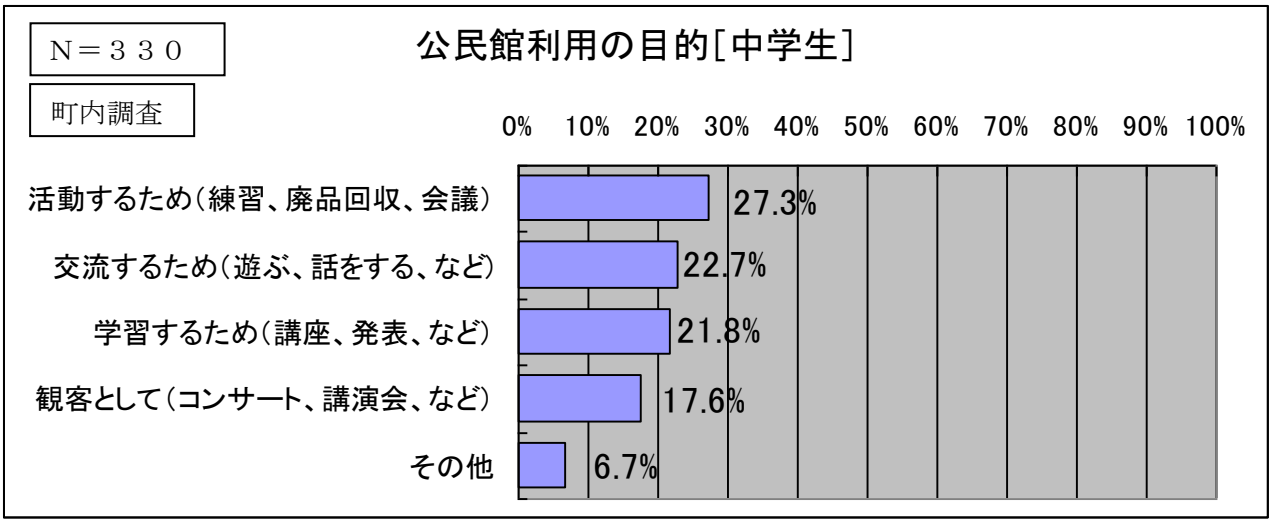


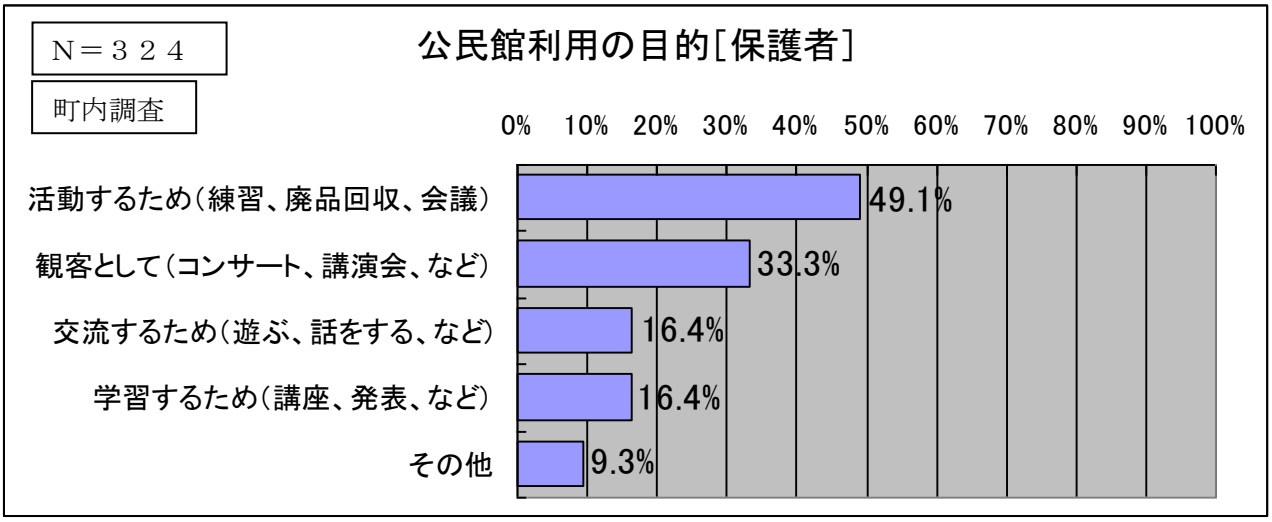
４－２　公民館利用の目的について

■ **公民館利用の理由は、中学生・保護者ともに「活動するため（練習・廃品回収・会議など）」が最も多い。**

○中学生に尋ねた調査では、「活動するため（練習・廃品回収・会議など）」が２７．３％で最も多く、次いで「交流するため（遊ぶ・話をする）」が２２．７％だった。
○保護者に尋ねた調査では、「活動するため（練習・廃品回収・会議など）」が４９．１％で最も多く、次いで「観客として（コンサート・講演会など）」が３３．３％だった。

問　　あなたは何のために公民館を利用しましたか。（あてはまるものを全て選ぶ）



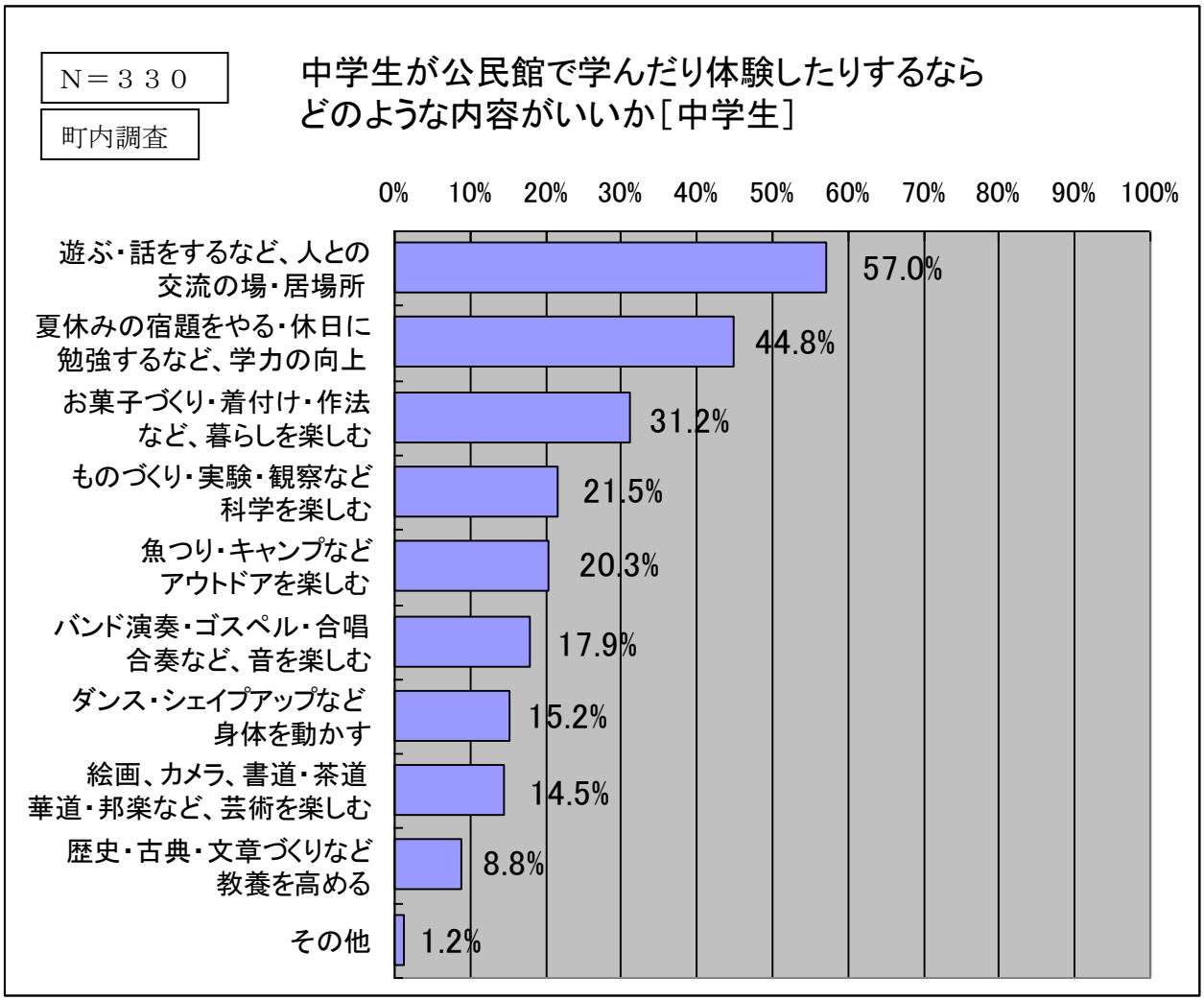


４－３　公民館でどのような活動を望んでいるか

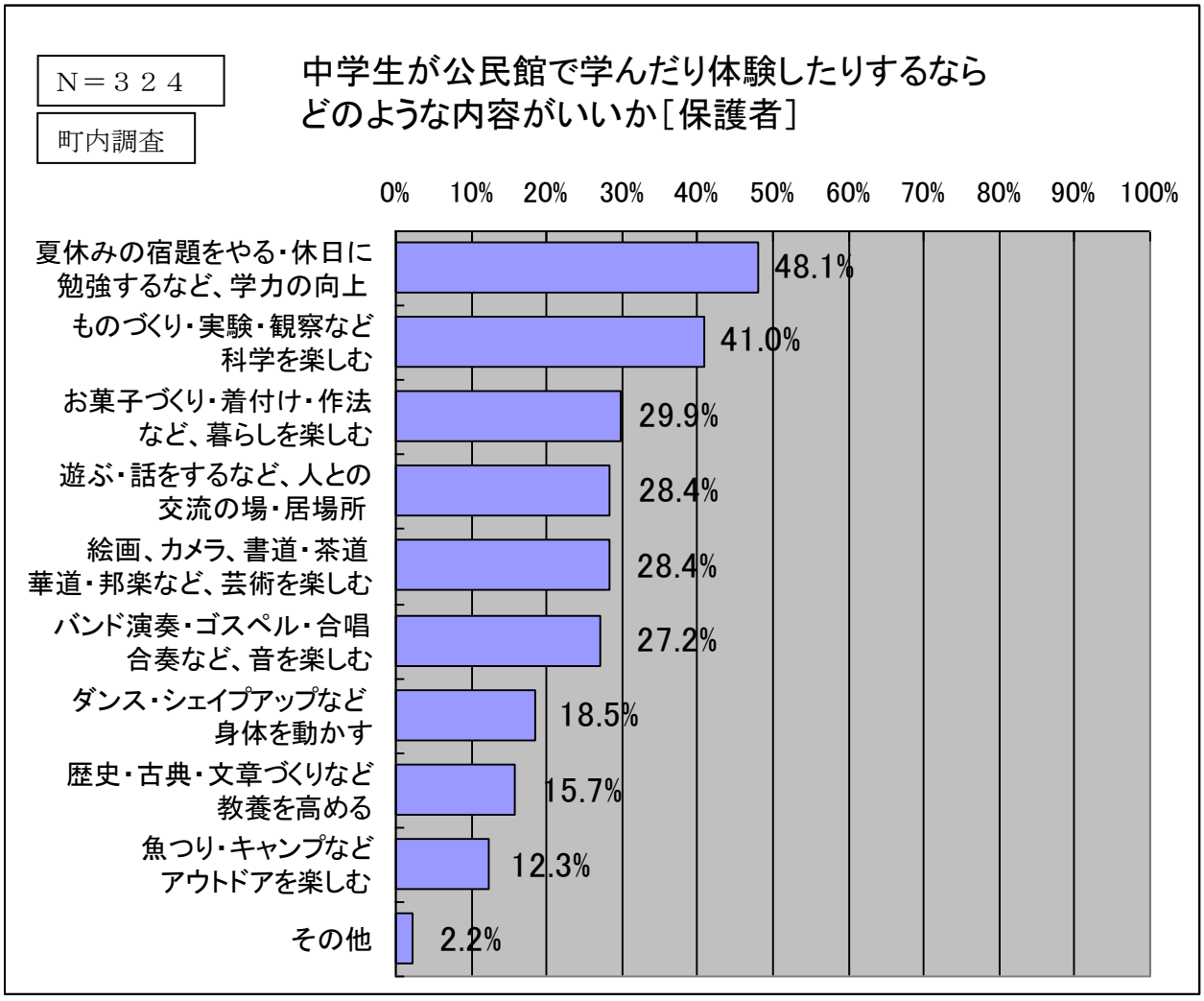
■ 「遊ぶ・話をするなど友人との交流の場・居場所」としての公民館を望んでいる中学生は約６割である。
■ 「夏休みの宿題をやる・休日に勉強をするなど学力向上の場」としての公民館を望んでいる保護者は約５割である。

○中学生を対象とした調査では、「遊ぶ・話をするなど友人との交流の場・居場所」が５７．０％と最も多く、次いで、「夏休みの宿題をやる・休日に勉強をするなど学力向上の場」が４４．８％となっている。
○保護者対象の調査では、「夏休みの宿題をやる・休日に勉強をするなど学力向上の場」４８．１％と最も多く、次いで「ものづくり・観察・実験など科学を楽しむ」が４１．０％となっている。

問　　公民館で学んだり体験したりできるなら、どのような内容がいいですか。（特にあてはまるものを３つ以内で選ぶ）



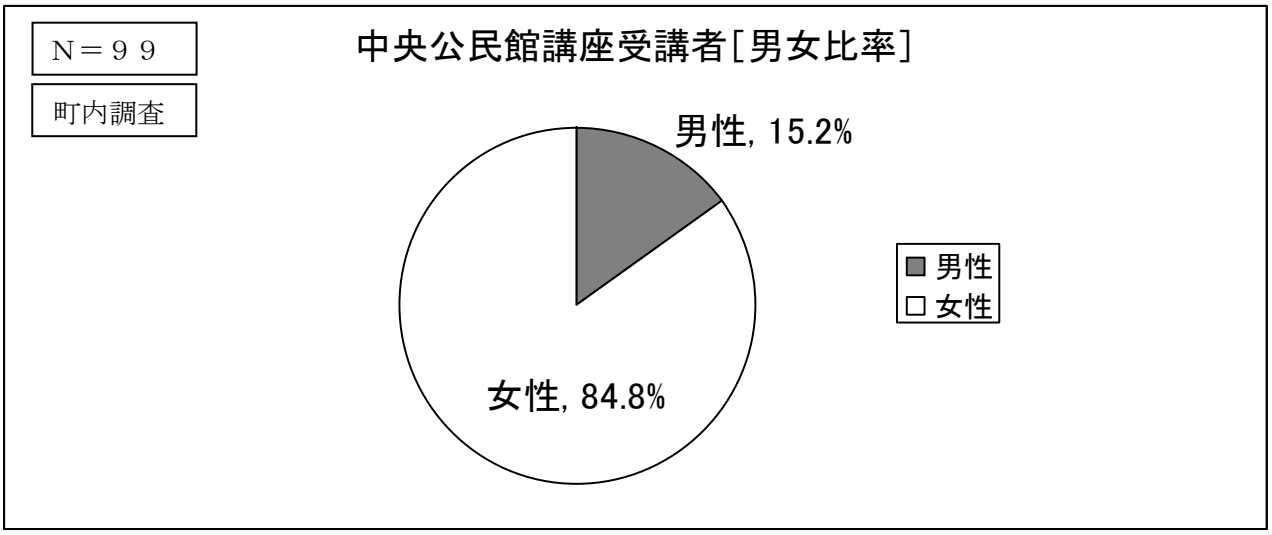
問　中学生の子どもたちが公民館で学んだり体験したりするなら、どのような内容がいいと思いますか。（特にあてはまるものを３つ以内で選ぶ）

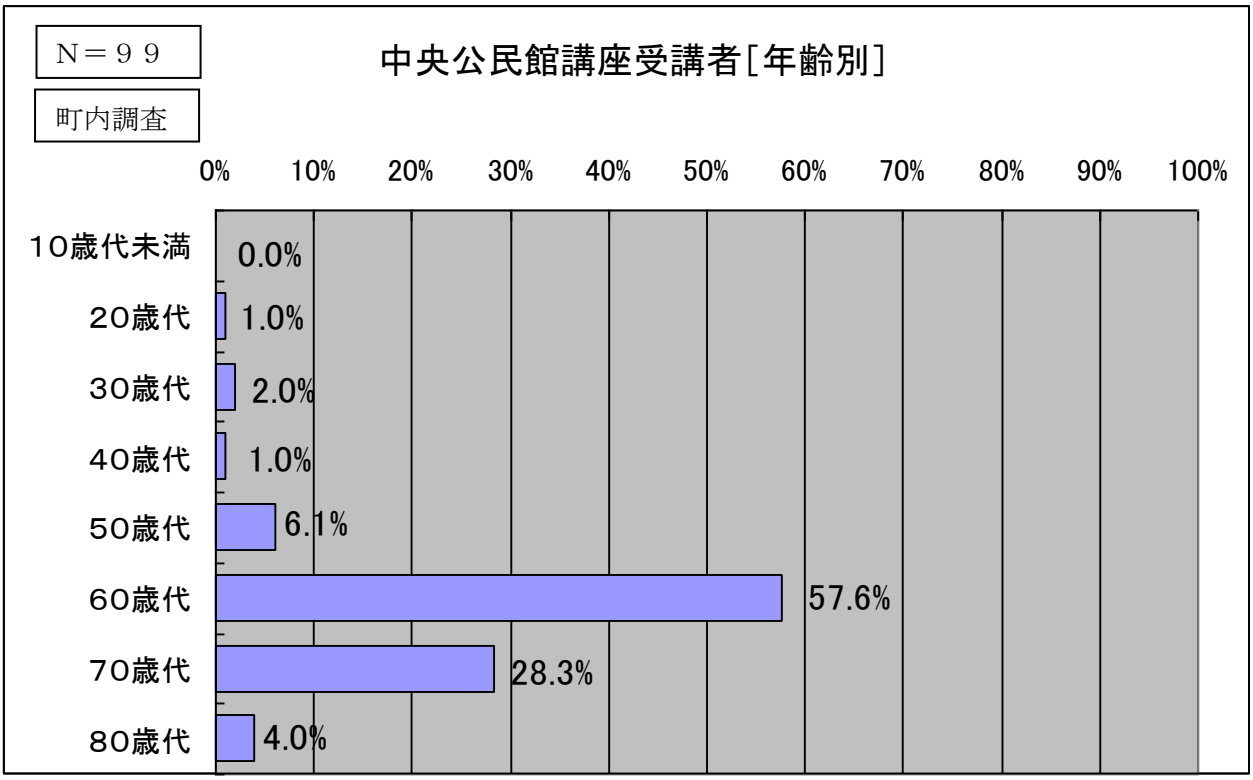


４－４　地域住民による公民館の利用状況について

■ **中央公民館講座受講者の８割以上は、女性である。**
■ **中央公民館講座受講者の８割以上は、６０・７０歳代である。**

○平成２３年度中央公民館講座受講者に実施したアンケートの結果によると、受講者の８４．８％は女性が占めており、男性を大きく上回っている。
○講座受講者の年齢構成では６０歳代が５７．６％と最も多く、次いで７０歳代が２８．３％だった。





第５節　地域活動及び公民館事業を活性化するためのアイディア

５－１　中学生の意見

■ 中学生の視点による講座の企画や地域行事活性化のためのアイディアが寄せられた。

○イベントの開催に関すること、創作・体験活動に関すること、スポーツ・レクリエーション活動に関すること、ボランティア活動に関すること、講座の内容に関すること、アウトドア活動に関することなどについて、中学生ならではの視点による多くのアイディアが寄せられた。

問　　次の場合あなたならどうしますか。

「２０人～３０人が集まる楽しい行事を企画しなければなりません。あなたなら、どのような企画を立てますか。なお、集まる人・活動する場所・必要となるお金は、あなたが自由に想像して決めてかまいません。」

■　イベントの開催に関すること

◆　壬生町に住む外国人の方々をたくさん呼び、その国の名物とか、食べ物とかを体験できるというもの。飲んだり食べたりが自由にできる。集まる人はどんな方でもＯＫ、活動する場所はわんぱく公園など、広い場所。必要なお金は、参加料として、１人９００円ぐらい。
◆　町民全員参加の音楽祭。
◆　ロックバンドフェスティバル何人かに分けてバンドを組んで活動。
◆　誰でも参加できるライブ（バンド・合唱・K-POP・J-POP 何でもあり）。
◆　関ジャニ∞のコンサート。「えりのあ」ライブ。収益金は全額被災地に寄付。中学生がスタッフ。
◆　お祭をひらく（夏祭り、秋祭りなど）。演奏・劇・屋台。
◆　クリスマスパーティー。
◆　上棟式のように、ある高い所から、お金、おかしなどを落とし、それを拾う。
◆　小さい子どもから高齢者の方まで楽しめる遊び（昔ながらのおもちゃ）。伝統的な遊び。
◆　１０代の人たちが集まり、色々話し合う。
◆　彼氏彼女がいない人が集まり、出会いのパーティーを開催。１５対１５の合コン。
◆　映画・ビデオ・DVD 鑑賞会。参加した人には菓子の詰め合わせを１人１袋あげる。

■　創作・体験活動に関すること

◆　工場見学。工場で作業。
◆　創作劇。
◆　体育館に泊まろう。
◆　全員でよさこいをおどる。みんなで衣装を手作りし、それを着ておどる。
◆　みんなで一つのものを制作する（町のシンボルになりそうなものや旗など）。
◆　巨大ダンボールクラフト作り（動くものあり）。風車・家・おみこしなど。
◆　みんなで教え合いながら楽しくおりがみなどで遊ぶ。
◆　公民館でお菓子作り。作り方を教えてくれる先生をおよびしてクッキーなどを作る。

■ **スポーツ・レクリエーション活動に関すること**

- ◆ ボーリング場に行って遊ぶ。ディズニーランド・ディズニーシーで遊ぶ。
- ◆ ドッジボール大会。スキー大会。バスケットボール大会。バドミントン大会。野球大会。
- ◆ カルタ取り大会。
- ◆ 壬生町陸上競技場で栃木ＳＣの選手と共に練習する。

■ **ボランティア活動に関すること**

- ◆ 高齢者との交流。幼稚園生との交流会。
- ◆ 地域の人々に役立つ仕事をする。
- ◆ 町内の１人暮らしの高齢者を対象に、中学生と一緒に料理を作り、一緒に食べる。

■ **講座の内容に関すること**

- ◆ 絵画教室。油絵体験。料理教室。星座の観察会。
- ◆ 「地球と仲よく」をテーマとして自然とふれあい、エコや地球について学ぶ内容。

■ **アウトドア活動に関すること**

- ◆ キャンプ場に行く。一泊二日。地域の人たちとバーベキューをする。
- ◆ 自然公園にて自然を楽しんだり、ピクニックをしたりする。

５－２　保護者の意見

■ 保護者の視点による、中学生が地域行事に積極的に参加するアイディアが寄せられた。

○中学生が地域の行事に積極的に参加するための、方法や方針の改善に関する意見や、学校教育との連携・協力に関する意見が多く寄せられた。
○中学生に参加を促すのは困難とする意見も一部見受けられた。

問　中学生が地域の行事に積極的に参加できるようにするには、どうすればよいと思いますか。アイディアをおきかせ下さい。

■ 主に方法や方針の改善に関する意見

◆ 中学生が興味を持ちそうなことをやる。中学生の流行を取り入れる。
◆ 自分の活動が地域に役立っていると感じられる場面をつくる。参加したことにより満足感が得られるようにする。
◆ 夏休みなど比較的時間がある時に実施する。
◆ 長期休業中、子どもたちが集まれる場所として公民館を開放する。
◆ 中学生が企画の段階から参加し、中学生主導で実行する
◆ 中学生本人たちにどんな行事なら参加したいかを聞くべきだ。大人の考えた企画を押し付けるのでは、参加が難しい。
◆ 大人の都合で企画するのではなく、もう中学生なので中学生が考えたりして行えばよいと思う。自分たちで考えて企画すれば積極的に活動すると思う。
◆ 今年行ったチャリティー交流会のような行事を増やす。中学生を主役にすることにより、中学生の関心が高まる。
◆ 中学生を含めた実行委員会形式にする。その子どもたちが中心となり、各自治体や育成会の人たちと話し合いに参加する。中学生の意見を取り入れてもらい、町の行事の参加、企画を行う。
◆ 子どもたちがリサイクル活動に取り組み、その収益金を子どもたちがつかえるようにする。子どもたちが働く喜びを味わえる。
◆ 中学生と小学生以下の子どもたちとの交流の場があればいい。中学生が先生・指導者として活躍する。
◆ 地域の方々と一緒に道路のゴミ拾いをするなど、清掃ボランティア活動から始める。
◆ 中学校の周りの花植えや清掃など環境美化活動をすることから、少しずつ地域との関わりを持っていくのがよい。
◆ 普段から顔を合わせる機会があるといい。コミュニケーションの機会がないと、なかなか積極的に参加できない。
◆ 壬生町の地区の運動会で中学生を大人・一般扱いすることをやめて、中学生を代表選手とする。
◆ ファミリー体育祭という素敵な行事があるので、参加できるよう種目を工夫する。
◆ 中学生の参加をうながすように、回覧板や各家庭に呼びかける。
◆ 学校では学べないことを楽しめるような行事にする。インターネットでも呼びかける。
◆ 幼少の頃から地域行事に１つでも多く参加する習慣作りが必要だと思う。

- ◆ 大人（役員）が負担だと思わず、中学生を上手に使って運営できるように企画する。
- ◆ 中学生を育成会の会員にする。現在役員が行っている仕事の一部を中学生にやってもらう。（行事の企画、準備、進行など）中学生主体の会にする。会費等お金の管理があるので保護者の協力も必要。
- ◆ 育成会の会員を中学３年生までとする。（受験をひかえているので、３年生は夏休みまでとする。）
- ◆ 育成会に中学生も加入して、中学生が計画を立てたり小学生を引っ張ったりできればいいと思う。
- ◆ 中学生以上になると育成会からはずれてしまい、夏祭り等では主役として参加できる場が無い。
- ◆ 子ども会を活性化し、中学生主体の子ども会にする。
- ◆ 個人で参加ではなく、家族や育成会を単位として参加できるようにする。
- ◆ まず、中学生になるまえ（幼、小）に行事に参加することが必要です。そのためには、親が積極的に地域行事に参加・協力しその姿を見せる事ではないかと考えます。
- ◆ 中学生に参加を促すなら「お手伝い（ボランティア）をおねがい」的な内容が年齢にあっていると思う。

■ 主に学校教育との連携や調整に関する意見

- ◆ ふるさとまつりへ参加することが、中学校の部活動で禁止されている。学校側の理解と協力が不可欠。
- ◆ 部活動があるため夏祭りなどは難しい。大会が春から秋にかけての開催され、冬場なら参加も可能だろう。
- ◆ 参加しやすいように学校側からも声をかけてほしい。部活などと重ならない日程にするなど、配慮が必要。
- ◆ 学校の行事があり、参加が難しい。学校と連携した企画を組んでみたらいいだろう。
- ◆ 日曜の午後とか土曜の午後など、部活がない時間帯に実施する。
- ◆ 中学校から生徒へ地域行事の案内をしたり、参加を勧めたりする。
- ◆ 学校と地域の関わりを今以上に密にする。
- ◆ 廃ビン回収のように学校行事の１つとして全員参加となれば、親も納得の上参加できる。
- ◆ 全ての部活動が休みの日を作る。家庭の日、地域の日を徹底する。
- ◆ 部活優先になるので、地域が統一して部活より地域行事を優先させるように働きかけなければ難しい。
- ◆ 地域の行事がある時には部活動より地域活動を優先できるよう、学校側にもお願いしたい。
- ◆ 個人ではなかなか参加を渋るから、部活動単位で参加できる地域行事を設ける。
- ◆ 長期休業中の宿題の１つとして参加を促す。
- ◆ 学校行事の一環として地域行事を実施する。
- ◆ 参加しやすいように学校などを通じて連絡するなど
- ◆ 行事への参加（ボランティア活動）を単位制にして評価する。
- ◆ 部活動が休みの日を増やし、中学生でも楽しめる様な行事にする。

- ◆ 地域のお祭りには、学校（部活）から「行ってはいけない」といわれていますので行きませんでした。
- ◆ 町だけで計画しても、部活やテスト勉強がある時では絶対に参加できない。
- ◆ 学校と協力し、本当にためになるものを計画してほしい。何をやったという実績がほしいだけなら無駄。
- ◆ 部活動の大会と重ならないよう日程を考慮する。教員（部活動顧問）の意識を変える。

■ **主に「参加を促すのは困難」とする意見**

- ◆ 学校での活動が忙しく、時間がない。行かせたくても無理。
- ◆ 部活動の時間が多すぎる。地域参画は学校との交渉次第だろう。
- ◆ 平日の放課後も休日も部活で忙しい。地域行事に参加できる時間を作るのが現実として難しい。
- ◆ 現実に勉強や部活動に必死に取り組んでおり、物理的にも難しい。
- ◆ 土日祝日の休みも部活動が１日あり、勉強もしなければならないので、参加を促すのは難しい。
- ◆ 中学生は今も昔も難しい年頃なので、積極的に参加させるのはとても大変だと思います。
- ◆ 塾や部活動があり、時間を作るのが難しいです。
- ◆ 土日は部活での試合や練習が必ず入っている。子どもが参加したいと思っても行ける状況ではない。
- ◆ 参加できる子どもも、友人が来られないなら行くことは難しい。
- ◆ 思春期ということを考えると、あの手この手を使ってもなかなか難しいと思います。

第２章　調査研究結果を受けての提言並びに方策

第１節　既存の組織・行事へのはたらきかけ

【提言１】　既存の組織・行事を生かし、つながり・絆づくりに取り組もう。

課題・現状［調査研究の結果］

- 「近所に住む住民とよく行き来している」と答える人は約１割に過ぎない。　(1-1)
- 地域の教育力が“以前に比べて低下している”と感じる人は５割を超えている。(1-2)
- ７割以上の子どもが近所の人にしかられたり遊んでもらったりした経験がない。(1-3)
- 町内の自治会で最も盛んに行われている行事は、清掃・花植え・リサイクルなどいわゆる「環境美化活動」型の行事であり、約８割の自治会で行われている。(1-4-1)
- 自治会行事に最も多くの中学生が参加しているのは、花植え・リサイクル活動など「環境美化活動」であり、自治会の約２割である。(1-4-2)
- ９割を超える子ども会育成会で、「スポーツ・レクリエーション」型の地域活動に取り組んでいる。(1-5-1)
- 中学生を会員としている子ども会育成会は約４割である。(1-5-3)

提言実現のための主な方策（概要）

【方策　１】中学生を含めた世代間交流の促進を各組織へはたらきかける。

【方策　２】中学生を受け入れてもらえる体制づくりを各組織へはたらきかける。

【方策　３】各種行事で中学生が運営スタッフとして活躍できる場面を設定する。

【方策　４】各組織が集い、情報交換や意見交換ができる機会を設定する。

東日本大震災を契機に、人のつながりや絆づくりの重要性が改めて浮き彫りになった。住民どうしの交流が希薄化し、地域の教育力の低下が指摘されている今日、住民どうしの交流が、中学生を含めた世代間交流という形で行われることは、こうした今日的課題の解決を図る上でたいへん望ましい。（調査研究 1-1、1-2、1-3 より。）

その一方で、新たな組織を立ち上げたり特別なことや目新しいことばかりを追求したりすると、取り組む人への負担感が増し、永続的な取組を期待できなくなるおそれもある。幸い、町内には各自治会や単位子ども会育成会をはじめとして既に多くの住民組織があり活動を展開している。（調査研究 1-4-1、1-4-2、1-5-1、1-5-3 より。）それら既存の組織に対して、中学生を受け入れてもらえるような体制づくりの強化を依頼したり、町内で既に行われている各種行事に中学生が運営スタッフとして活躍できる場面を設けてもらったりすることによって、中学生を含めた世代間交流の活性化を図ることが望ましい。

また、中学生は、日々の生活の中で、学校・家庭・部活動・スポーツクラブ・自治会・子ども会育成会など同時に複数の組織に所属している。中学生の地域参画のあり方について、各組織が集い意見を交わせるような機会を、行政や社会教育委員の会議等がコーディネートできるとよい。

――提言１のための具体的な方策――

【方策　１】

住民同士の交流が、中学生を含めた世代間交流という形で行われるよう、既存の各組織にはたらきかける。

→　色々な機会を利用して、世代間交流の重要性や、つながり・絆づくりの重要性に対する興味・関心を喚起していく。

【方策　２】

既存の各組織に対して、中学生を受け入れてもらえる体制づくりをはたらきかける。

→　中学生は次世代の壬生町を担う存在である、ということへの理解と協力を求める。

【方策　３】

中学生が、町内で既に行われている各種行事の運営スタッフとして活動できるようにする。

→　ふるさとまつりや蘭学通りまつりなどでは、多くの中学生が「参集者」として会場に来ている。「参集者としての中学生」を「参画者としての中学生」へと導いていくためには、「運営スタッフとして関わりたい中学生を募集する」「積極的に中学生に声をかける」などのしかけづくりが大切である。

【方策　４】

既存の各組織が集い、中学生の地域活動への参画をどう促していくかについて自由に意見を交わせたり情報交換をしたりできる機会を設ける。

→　「各々の組織でできること」「他組織と連携協力してできること」「行政として必要な支援のあり方」等を浮き上がらせるための話し合いの機会が必要である。

→　下表１は、既存のいくつかの組織が主催する行事（子どもたちが関係している行事）について聞き取りした内容をまとめたものである。（順不同、敬称略）

表1　各組織と子どもたちとのかかわり状況

組　織　名	主　催　行　事　等	平成23年度開催日	備　　考
■町内各自治会	・各自治会の行事 ・町内行事への参加 等	・各自治会の計画	・夏祭り・どんど焼き・清掃・花植え・リサイクル・旅行・お楽しみ会・レク等。
■壬生ロータリークラブ	・模範生徒表彰	・3月上旬	・模範的な学校生活を送る中学生（両中学校から推薦された男女２名ずつ計４名）に賞状と記念品を授与。
■みぶバンドフェスタ実行委員会（壬生ライオンズクラブ）	・みぶバンドフェスタ	・H23.11.6（土）	・壬生中・南犬飼中・壬生高校吹奏楽部による演奏や３校吹奏楽部＆ＯＢ・ＯＧによる合同演奏。

組　織　名	主　催　行　事　等	平成23年度開催日	備　　考
■ゆうがおスポーツクラブ	・サイクリング ・ハイキング ・スキー教室　等 ・各専門部による企画	・各専門部による計画	・一般会員のほか、中学生を対象とした会員を募集。 ・平成２３年度現在、１０名の中学生が加入。
■子ども会育成会連絡協議会	・サマーキャンプ	・H23.8.5(金)～7日(日)	・中学生１名・高校生８名がボランティアとして小学生のキャンプをサポート。
	・ドッジボール大会	・H23.10.23（土）	・各子ども会育成会単位で参加。
	・カルタ大会	・H24.2.4(土)	・中学生２名・高校生４名がカルタの読み手として運営をサポート。
■総合産業祭り実行委員会 （壬生町商工会）	・壬生町総合産業まつり	・H23.11.3（木・祝）	・商工団体・農業団体・産業団体による展示販売等。 ・壬生中学校生徒（総合的な学習の時間によさこいソーランを学んだ生徒）がステージに出演し演技を披露。
■蘭学通りまつり実行委員会 （仲通り商店会） （栄町商店会） （上通商店会）	・蘭学通りまつり	・H23.10.16（土）	・バンド演奏や和太鼓の演舞、親子参加型イベント、蘭学通りグルメの出店等。 ・壬生中学校生徒会がペットボトル交換コーナーや年少児を対象としたゲームコーナー等を担当。 ・壬生高校生徒会も社会教育委員の会議と共に出店。自主制作映像「みぶまちっく天国」を放映。
■壬生町商工会	・ホタル祭り	・平成22･23年度中止［21.6.12(土)］	・保育園児によるホタル幼虫の放流。
■壬生町観光協会 （商工観光課）	・しののめ花まつり	・平成23年度中止［H22.4.3(土)～11（日）］	・国谷幼稚園児によるマーチング、メリーランド保育園児によるエイサー演舞等。
	・八坂祭	・平成23年度中止［H22.7.4(日)～11(日)］	・笛・太鼓等の囃子方として小中学生が参加。
	・ふるさとまつり	・H23.8.20(土)～21(日)	・ふるさとまつり出店会加盟団体が模擬店を出店。 ・上田子どもおはやし会や町内自治会、婦人会など、３１の団体が踊り手として参加。

組　織　名	主　催　行　事　等	平成23年度開催日	備　　考
■はにしの里ふれあい花まつり実行委員会	・はにしの里ふれあい花まつり	・平成23年度中止［H.22.4.18(日)～25(日)］	・すけがい保育園児による演奏、保護者による餅つき、よさこいチーム出演、バンド演奏、模擬店の出店等
■下稲葉花まつり実行委員会	・下稲葉コスモス街道花まつり	・平成23年度中止［H22.10.12(月)］	・熱気球体験、お宝まき、バンド演奏、いなば保育園児お遊戯、メリーランド保育園お遊戯、地場産直売、模擬店等
■いなば花と緑の郷づくり協議会	・いなばの郷いちご狩りふれあいフェスティバル	・平成23年度中止［H22.6.6(日)］	・いちご狩り、メリーランド保育園児の演技、食農カルタ取り、よさこいin Mibuによる演技、歌謡ショー、苗木配付等
■睦っ子の森フェスティバル実行委員会	・睦っ子の森フェスティバル	・平成23年度中止［H22.5.30(日)］	・模擬店、ゲームコーナー、ペットボトル回収等。
■健康ふくしまつり実行委員会 （健康福祉課） （壬生町社会福祉協議会）	・健康ふくしまつり	・H23.10.23(日)	・健康チェック、健康相談、介護保険、福祉用具展示等。 ・民生委員や福祉ボランティア等による活動。
■公民館まつり実行委員会 （中央公民館）	・公民館まつり	・H23.12.25(土)	・大ホール：町内各種団体の発表や演技 ・中ホール：作品展 ・ロビー：消費生活展、正面玄関にて模擬店を出店。 ・壬生少年少女合唱団の子どもたちによる合唱や、バレエ教室にかよう子どもたちによる演技。
■壬生町文化協会 （中央公民館）	・壬生町文化祭	・H23.10.8(土)～11.27(日)	・歌謡大会、華道展、書道展、写真展、美術展、民謡民舞大会、詩吟大会、盆栽展、音楽祭、囲碁大会、フォークダンス、健康ダンス、フラダンス、日本舞踊会、茶会、邦楽会等
	・東日本大震災被災者支援チャリティー交流会	・H23.7.16(土)	・文化協会員、町内小中学生等による歌、演奏発表。絵画や写真の展示、模擬店

組　織　名	主　催　行　事　等	平成23年度開催日	備　　考
■壬生町体育協会	・レクリエーション大会 ・硬式テニス大会 ・バドミントン大会 ・ソフトテニス大会	・各専門部による計画	・町内中学生が成人とともに選手として参加。
■ＪＡしもつけ（壬生地区営農経済センター）	・ふれあいまつり	・H23.11.26(土)～27(日)	・南犬飼中学校吹奏楽部の演奏、宇都宮大学エイサー、宇都宮大学アカペラ、地元のおやじバンド演奏、栃の葉よさこい連による踊り、農産物直売、品評会、健康相談会、等
■スポーツ振興課 （壬生町体育協会） （壬生町体育指導員会）	・健康ロードレース大会兼駅伝選手選考会	・H23.12.4(日)	・小学生男子１４７名、小学生女子５６名、中学生男子８４名、中学生女子５７名が参加。
	・ファミリー体育祭	・３年毎に開催 ［H22.10.10(祝)］	・種目によっては「小学生を含める」等のルールを設定。
■壬生町児童館 （壬生町母親クラブ）	・児童館まつり	・H23.10.1(土)	・子どもスタッフを募集。小学生が運営スタッフ（大人）と一緒に活動。
■生涯学習課	・成人式	・H24.1.8(日)	・壬生中・南犬飼中学校吹奏楽部による国歌・町民の歌の演奏。

第２節　大人へのはたらきかけ（中学生を受け入れる地域の体制づくり）

【提言２】　中学生を信じてまかせる姿勢の大切さを大人全体で共有しよう。

課題・現状［調査研究の結果］

■　８割の子ども会育成会では、育成会役員のみの話し合いで活動内容を決定している。（1-5-2）

■　中学生の約４割が「地域行事に参加している」と答えている。（3-1）

■　中学生の３割が、夏祭りやどんど焼きなど「祭り・伝統芸能の継承」に関する地域行事に参加している。（3-2）

■　９割を超える保護者が「中学生になると地域の行事に参加しなくなる」と感じている。（3-3）

■　地域行事に参加していると回答する子どもは、小学生から中学生になると２割以上減少する。（3-4）

■　中学生になると地域行事への参加が減少する原因として、８割近い保護者が「部活動や勉強などで忙しい」ことを挙げている。（3-5）

■　ぜひ積極的に参加させたいと考えている保護者は約２割である。（3-6）

提言実現のための主な方策（概要）

各組織の大人に対するはたらきかけ

【方策　５】地域行事を行うときの実行委員会に、中学生をメンバーとして加える。

【方策　６】大人だけで地域活動の内容を決めず、中学生の意見に耳を傾ける。

【方策　７】「ありがとう」「君のおかげだよ」と中学生に温かなメッセージを送る。

【方策　８】中学生の失敗に寛容なかかわり方をする。

【方策　９】中学生に、小学生に対するリーダー（先輩）としての役割を与える。

【方策１０】地域行事の予定や情報を学校・家庭に連絡し、共有する。

【方策１１】「地域社会＝もうひとつの居場所」という認識を深める。

【方策１２】何より大人自身が地域活動を楽しむ。

保護者に対するはたらきかけ

【方策１３】積極的に我が子を地域活動に送り出す。

【方策１４】中学生は壬生町の次世代の担い手である、という認識を深める。

【方策１５】保護者自身、地域行事に積極的に参加する。

教職員に対するはたらきかけ

【方策１６】中学生の活動が勉強や部活動ばかりに偏らないよう、地域との協働を深める。

【方策１７】地域行事に、部活動・学級・委員会等の単位で参加する。

【方策１８】地域行事での中学生の活躍を、学校・学級内で承認し合えるようにする。

行政（生涯学習課）に対するはたらきかけ

【方策１９】中学生の活動実績を記録し評価するポイントカードを作成し周知する。

【方策２０】各組織と学校がつながれるよう、コーディネート機能を充実させる。

今回の調査研究を通して、９割を超える保護者が「中学生になると地域活動に参加しなくなる」と実感しており、かつ「地域行事に参加する子どもは、小学生から中学生になると２割以上減少する」という状況が明らかになった。（調査研究 3-4 より。）「中学生の地域活動離れ」は本町社会教育行政が取り組まなければならない地域課題・今日的課題のひとつであることが明らかになった。学校・家庭・地域社会・行政が一体となってこの課題に取り組んでいかなければならない。

地域活動離れの原因は複雑かつ多様であるが、８割近い保護者が「部活動や勉強などで忙しいこと」を原因のひとつに挙げている。（調査研究 3-5 より。）さらに、地域活動に積極的に我が子を参加させたい保護者は２割に過ぎないという実態も明らかになった。（調査研究 3-6 より。）中学生を取り巻く大人のあり方自体も大きく問われている。

だがその一方で、「地域活動に参加している」と答える中学生は現状で４割に上り、そのうち３割が夏祭りやどんど焼きなど「祭り・伝統芸能の継承」に参加している状況も浮かび上がっている。（調査研究 3-1、3-2 より。）参加する中学生をさらに増やすための方策も重要だが、既に地域活動に参加しているこれら中学生が「参加して良かった」「また参加したい」と満足感・達成感を感じられるためのしくみづくりも併せて重要である。

中学生が満足感・達成感を味わえるためには、単なる「大人のお手伝い」に終始するような活動であってはならない。約８割の子ども会育成会では、活動内容を育成会役員のみの話し合いで決定しているという状況も浮かび上がっているが、話し合い活動に中学生を交え、中学生がやりたいことは何なのか、興味・関心はどこにあるのかを把握すること、すなわちニーズの把握は大切なプロセスである。（調査研究 1-5-2 より。）

――提言２のための具体的な方策――

各組織の大人に対するはたらきかけ

【方策　５】

地域行事を行うときに、中学生に直接声をかけたり募集したりして、組織（企画委員会、運営委員会、実行委員会等）のメンバーに加える。

→　大人だけで実行委員会や企画委員会をつくるやり方や、大人だけで企画・運営していくやり方（大人中心の行事）を改める。大人と一緒に話し合い、企画を練り上げていく。次世代を担う中学生が地域活動について学ぶトレーニングの機会となる。

【方策　６】

中学生には大人にはない豊かで自由な発想がある。大人だけで活動内容等を決めようとせず、中学生の意見に耳を傾け、中学生が何に興味・関心をもっているのかニーズを把握する。

→　単なる「大人の活動のお手伝い」として地域行事に参加するのではなく、中学生は次世代の地域の担い手という視点を大切にする。

【方策　７】

「活動してくれてありがとう」「君のおかげだよ」と中学生に温かなメッセージを送る。

→　平成７年１月１７日の阪神淡路大震災では、道路が寸断され必要物資の輸送がままならない初期状況の中で大活躍したのは、自衛隊でも災害ボランティアでもなく、地元の暴走族に所属する青少年たちだったという。バイクを使って、避難所で待ち受ける人たちに救援物資を届けたり、力仕事に積極的に参加したり、社会貢献活動を行った。日頃、近隣住民等に多大な迷惑をかけて「ばかやろう」と罵声を浴びることの多かった彼らだが、自らの意思で人の役に立つ経験をした。世話になった地域住民は彼らにたいへん感謝し、心から「ありがとう」を伝えたという。

こうした経験により、彼らは「人の役に立てることの喜び」を初めて味わい、自己有用感を高め、社会における自分の立ち位置を理解できるようになったという。現在、家庭をもつ社会人になった元暴走族の青年は、ＮＨＫ第１ラジオの中で、「阪神淡路大震災での救援という地域活動を体験して人生が変わった」と語っている。

そもそも人は、社会の中で他者から認められたり必要とされたりすることで、いきいきと生きていくことができる存在である。「必要とされることを何よりも必要としている」とも言える。中学生に対して、「君たちの力が必要だよ」「活動してくれてありがとう」「君たちのおかげだよ」と中学生へ伝えていく温かなメッセージも欠かせない。そういうメッセージを中学生に送ることのできる地域の大人の姿勢こそ、今求められている。大切なことは、中学生を受け入れようとする地域の大人の意識である。

【方策　８】

「失敗してもいいんだよ」「君にまかせたよ」と、失敗に対して寛容な姿勢で接する。

→　中学生の手による活動は、全て上手くいくとは限らない。つまずいたり、失敗したり、時には仲間と衝突することも予想される。そうした中学生を信じて、最後までまかせるということは、大人にとってたいへん勇気がいることである。

だが、成長の過程で様々な“トライアル・アンド・エラー”を経験することは、自分を知り自分をコントロールする術を身につけていく上で、中学生にとってたいへん大きな財産となる。若いときに積んだ経験は忘れにくいし、次世代を担う子どもたちにとって良きトレーニングの機会でもなる。中学生と一緒に活動する大人には、「失敗してもいいんだよ」「おもいきりやってごらん」と“失敗に寛容な姿勢”や、“最後まで君に任せたよ”と信じる姿勢も求められる。

【方策　９】

中学生に、小学生に対するリーダー（先輩）としての役割を与えていく。

→　小学生の活動を円滑にする効果に加えて、中学生自身の成長にもつながる可能性が期待できる。

→　小学生の頃は「参集」、中学生になると「参画」というように、発達段階に応じてひとつひとつ階段を登っていけるような体制をつくる。

【方策１０】

地域行事の予定や情報を家庭や学校へ連絡し、家庭・学校・地域で共有し合う。

→　地域行事等で活躍している中学生の素晴らしさや頑張ったことなどを学校・家庭へと伝え、互いに連携・協力し合う関係を深めていく。

【方策１１】

「地域を基盤にする組織や行事は、学校や家庭などと同様に大切な居場所である」という認識を深める。

→　「勉強は苦手だけれど部活動は好きな中学生」、「運動は苦手だけれど勉強は得意な中学生」、「学校ではつらいことが多いけれど、地域の中で活動するのが好きな中学生」など、いろいろな特性をもつ中学生がいる。個の特性に応じて活躍できる体制を、地域社会の中に用意していくことは大切である。

【方策１２】

大人自身が地域活動を楽しんでいる姿を、中学生が目にできるようにする。

→　「大人が楽しければ中学生も楽しい。中学生が楽しければ地域全体が元気になる」という好循環につながる。

→　いつの時代も大人の真似をしたがるのは子どもの常である。地域活動に励み楽しむ大人の姿は、中学生がやがて大人になったときの“よき人生モデル”にもなる。

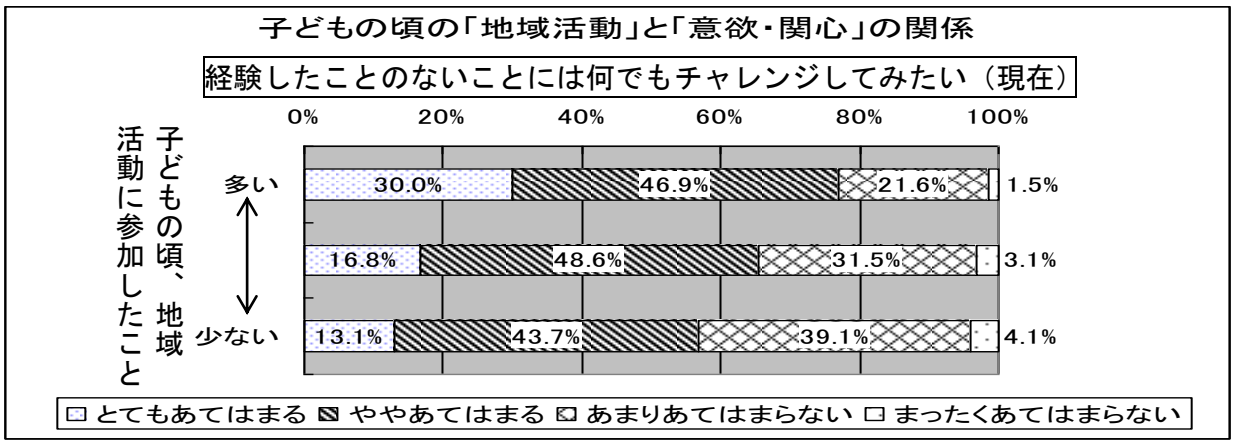
中学生の保護者に対するはたらきかけ

【方策１３】

いろいろな価値観・人生観をもつ地域の人と一緒に行動することの素晴らしさへの理解を深め、積極的に我が子を地域活動へ送り出す。

→　子どもの頃、地域活動に参加した経験の多い人ほど、意欲や関心が高い傾向が見られるという下記の調査結果がある。保護者が集まる様々な学習機会（町教委主催の「子育て・親育ち講座」やＰＴＡ行事等）に、子どもの頃に地域活動に参加するメリットを保護者に伝えることが必要である。

〈参　考〉



【国立青少年教育振興機構「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」　平成２２年度】

【方策１４】

中学生は、壬生町の次世代の担い手である、という認識を深める。

→　現在行われている地域行事等の多くは、大人の価値観で展開している。２０年後、３０年後の壬生町の担い手は、現在の中学生である。その中学生が壬生町を愛し、地域を大切にしようと感じる心を育めるようにすることが大切である。

【方策１５】

保護者自身、地域行事に積極的に参加するようにする。

→　「親の背中を見て、子どもは育つ。」という言葉にも見られるように、保護者の姿勢は子どもたちに大きな影響を及ぼす。

中学校の教職員に対するはたらきかけ

【方策１６】

中学生の活動が、学校の勉強や部活動ばかりに偏ることがないよう、地域の関係機関等との協働を深め、中学生が多様な活動に取り組める機会を与える。

→　学校における勉強や部活動は、子どもたちの生きる力を育む上で重要な役割を果たしていることに違いはない。だがその力は、異なる世代の人や他の家庭の人と交流したり、いろいろな価値観・人生観をもつ地域社会の人と一緒に行動したりする経験と相まって育まれ伸長していくものである。学校教育ばかりでなく、家庭や地域の教育力を取り入れながら、教育活動を展開していくことが大切である。

【方策１７】

地域で行われる様々な催しに、部活動や学級、委員会等を単位として参加し、生徒が活躍できるようにする。

→　地域活動を妨げる一因として「部活動が多忙である」ことが挙げられている。部活動単位で地域活動に参加していくやり方は、「部活動があるため地域活動に参加できない」という課題を解消しうる可能性がある。

【方策１８】

地域行事での中学生の活躍を、学校・学級における様々な機会（全校朝会、朝の会、帰りの会、道徳の時間、学級活動の時間等）で認めたり褒めたりする。

→「他者から承認され信頼されること」、「がんばりが周囲から正当に評価されること」は、自尊感情を高め、次へのエネルギーを蓄える原動力となる。

行政（生涯学習課）に対してのはたらきかけ

【方策１９】

地域活動に参加した中学生の活動実績を評価し、「やってよかった」という達成感が記録として残るように、ポイントカードを作成する。

→　町内で地域活動を行った場合、ポイントカードに地域住民からスタンプを押してもらえるような仕組みをつくる。得たポイントを学校に提示することにより、学校側から活動実績を評価・承認してもらえるようにする。

【方策２０】

各組織と学校が連携・協力し合えるよう、連絡・調整のための機能（コーディネート機能）を充実させる。

→　地域行事の予定や情報を学校に伝えたり、学校側の要望等を地域の各組織に伝えたりする中間支援を行う。

第３節　中学生へのはたらきかけ（次世代の地域の担い手の育成）

【提言３】　地域活動の魅力を中学生に発信し、興味･関心を高めていこう。

課題・現状［調査研究の結果］

- 自主的な参加はないが、呼びかけられれば参加する中学生がいる子ども会育成会は、約１５％である。（1-5-4）
- 平日の自由時間は「２時間～３時間程度」、休日の自由時間は「４時間以上」ある。平日の自由時間が「まったくない」または「１時間未満」と感じている中学生が約１５％いる。（2-1）
- 部活動のない放課後及び部活のない休日ともに、「家でゆっくり過ごす」が最も多い。（2-2）
- 運動部や文化部に加入している中学生は、約９割である。（2-3）
- 中学生の視点による、講座の企画や地域行事の活性化のためのアイディアが寄せられた。(5-1)
- 保護者の視点による、中学生が地域行事に積極的に参加するアイディアが寄せられた。(5-2)

提言実現のための主な方策（概要）

【方策２１】地域行事の予定や実行委員の募集に関する情報を提供する。

【方策２２】部活動のない曜日・時間を活用して地域貢献活動等に励めるよう促す。

【方策２３】地域活動に興味・関心のある生徒を募り、実行委員会を組織する。

【方策２４】直接声をかけ、地域社会は中学生の力を必要としていることを伝える。

町内中学生の約９割が中学校で行われる部活動に参加している。（調査研究 2-3 より。）「中学生の地域活動離れ」の一因として「勉強や部活動による中学生の多忙感」を指摘する意見があるが、今回の調査では平日には２～３時間程度、休日には４時間以上の「自由になる時間がある」と感じている中学生の意識が明らかになった。（調査研究 2-1 より。）

また、部活動のない放課後及び休日の過ごし方を問う調査では、「家でゆっくり過ごす」という回答が最も多かった。（調査研究 2-2 より。）ゆっくり過ごすことに費やしてきた時間を、地域活動の中へといざなっていくしかけが重要となる。そのためには、中学生の視点や保護者の視点にもとづく多くの豊かなアイディアに寄り添うことも大切である。(調査研究 5-1、5-2 より。)

また、子ども会育成会の行事に、「自主的な参加はないが呼びかけられれば参加する中学生がいる」と回答した子ども会育成会は約１５％あることも分かった。「地域活動に参加してみませんか」と中学生に声をかけ、中学生の背中を押して勇気づけていくかかわりも大いに必要である。（調査研究 1-5-4 より。）

――提言３のための具体的な方策――

【方策２１】

地域行事の予定や実行委員の募集に関する情報を、様々な媒体（チラシ・ポスター・ホームページ等）を通じて事前に中学生へ知らせ、参加を呼びかける。

→　中学生が地域社会で活動することの特徴のひとつは、価値観や人生観が異なる人たちとの交流や年齢が異なる様々な世代の人たちと交流が図れることであり、将来の人生モデルを獲得する上で重要である。同年代・同質の人たちが集まる中学校の教室の中だけでは決して味わうことはできない。地域活動のこうした魅力を、中学生に明確に伝えていくことが大切である。

→　町ホームページに、町内で開かれる各種行事予定一覧を掲載する。運営スタッフ（中学生）募集の有無を記載しておき、中学生が閲覧・申込できるようにしておく。

【方策２２】

部活動の行われない曜日・時間を活用して地域貢献活動等に励めるよう、どんな地域貢献活動（ボランティア活動）が可能か、中学生に提示する。

→　中学生によるアンケートでは、「高齢者との交流を図りたい」「地域の人々に役立つ仕事をしてみたい」「町内の１人暮らしの高齢者と一緒に料理を作り、一緒に食べる機会をつくりたい」など、各種ボランティア活動に関する提案が見受けられた。こうしたニーズにこたえるためには、ボランティア活動をコーディネートする機関（例えば社会福祉協議会等）との連携・協力が必要である。

【方策２３】

地域活動に興味・関心のある中学生を募り、実行委員会を組織する。公民館長や社会教育委員などが、中学生の地域活動を支援していく。

→　月例の実行委員会を開催し、活動内容を話し合って決めていく。

→　中学生が主体的に活動することとし、講座形式はとらないほうがよい。

→　地域の人たちの援助・指導が必要な場合は、しかるべき行政機関・関係各種団体等に連携・協力を依頼する。

【例】

活動内容	連携・協力を依頼する行政機関・関係各種団体
ボランティア活動	民生委員、社会福祉協議会等
ものづくり・料理	日頃公民館を利用している各種団体等
文化活動	町文化協会、各種団体等
スポーツレクリエーション	ゆうがおスポーツクラブ、町体育協会等

【方策２４】

直接声をかけ、地域は中学生の力を必要としていることを伝える。

→　地域の次世代の担い手として中学生に期待していることを言葉で伝え、「やってみようかな」と思ってもらえるように様々な機会を通して勇気づけていく。

第４節　公民館の機能を高めるためのはたらきかけ

【提言４】　学びの場、活動・交流の場としての公民館機能を充実させていこう。

課題・現状［調査研究の結果］

- 約４割の中学生が、公民館を利用したことがない。（4-1）
- 公民館利用の理由は、「活動するため（練習・廃品回収・会議など）」が最も多い。（4-2）
- 約６割の中学生が、「遊ぶ・話をするなど友人との交流の場・居場所」としての公民館を望んでいる。（4-3）
- 約５割の保護者が、「夏休みの宿題をやる・休日に勉強をするなど学力向上の場」としての公民館を望んでいる。（4-3）
- 中央公民館講座受講者の８割強を女性が占めている。また全利用者の８割強が６０・７０歳代である。（4-4）
- 中学生の視点による、講座の企画や地域行事の活性化のためのアイディアが寄せられた。(5-1)
- 保護者の視点による、中学生が地域行事に積極的に参加するアイディアが寄せられた。(5-2)

提言実現のための主な方策（概要）

【方策２５】減免制度の充実や祝日を開館日とするために、公民館使用条例等を改正する。

【方策２６】中学生を対象とした講座を、中学生の興味・関心に基づいて開設する。

【方策２７】公民館事業を支援する「運営補助ボランティア」の中学生を募る。

【方策２８】居場所機能（交流コーナー）を充実させる。

中央公民館講座受講者の約８５％が女性であり、かつ年齢別では６０・７０歳代の方が約８６％となっている。利用者層の偏りが見受けられる状況下、今回の調査では、「中学生の４割が公民館を利用したことがない」という実態が明らかになった。(調査研究　4-1、4-3 より。）またその目的は、練習・廃品回収・会議などの活動、つまり「部屋を借りる」という利用形態が最も多いという実態も併せて明らかになった。（調査研究 4-2 より。）

中学生の公民館活動を促進する上で、中学生やその保護者が何を望んでいるのかということ、すなわち「ニーズの把握」は何よりも大切な作業である。(調査研究 5-1、5-2 より。)

今回の調査では、約６割の中学生が「遊ぶ・話をするなど友人との交流の場・居場所」としての公民館を望み、かつ約５割の保護者が「夏休みの宿題をやる・休日に勉強をするなど学力向上の場」としての公民館を望んでいるという意識も明らかになった。中学生の興味関心に基づいて講座を企画していく姿勢に加えて、交流・居場所機能の充実、学力向上をはかるための機能の充実が今後求められる。（調査研究 4-3 より。）

――提言４のための具体的な方策――

【方策２５】

公民館活動を活性化するために、減免制度や休館日等について定めた公民館使用条例や施行規則等を改正する。

→　中学生のための開館日（毎月１回土曜日又は日曜日或いは祝日の午後等）を設けたり、中学生が使用する場合は無料（地域住民が中学生との交流を目的に利用する場合は地域住民の利用料金も無料）としたりするなど、減免制度を充実させる必要がある。

→　現在、公民館は国民の祝日が休館日となっている。地域住民の立場からすると、祝日は活動しやすい好機であるので開館日とする。

【方策２６】

中学生を対象とした講座を、中学生の興味・関心に基づいて企画する。

→　中学生によるアンケートでは、大人にはない豊かな発想力による多彩なアイディアが寄せられた。社会教育事業を企画・立案する上で、対象とする地域住民のニーズの把握やマーケティングは必要不可欠な作業である。

【方策２７】

いろいろな公民館事業を支援する“運営補助ボランティア”として中学生が活動できるようにする。

→　単なる「お手伝い」でなく、公民館活動を充実させるパートナーとして中学生をとらえ直していく姿勢が必要である。

【方策２８】

人々が気軽に集い、談笑し、同世代の人たちや異世代の人たちとつながり合えるような居場所機能（例えば交流コーナー）を備える。

→　現代は自宅の庭から縁側が消え、地域の人々が気軽に集い談笑できる場所が喪失しつつある時代である。平日の放課後や休日には、中央公民館ロビーで談笑したり勉強したり電子ゲームに興じたりする小・中学生の姿が多々見受けられる。そうした小・中学生を、公民館事業へと誘っていく仕組みづくりが大切である。

→　「公民館は学びの場なのだから、談笑したり電子ゲームを認めたりすることは不謹慎だ」という意見もある。公民館に集う小・中学生を「うるさいから」とか「他の利用者の邪魔になるから」と排除してしまうことは簡単なことだが、公民館を利用したことのない中学生が４割いるという状況下、まずは公民館を身近に感じてもらえるためのしかけが重要である。

結びに

平成２３年１月２４日付で壬生町教育委員会 池節子 教育委員長より諮問された内容について協議を重ねていた折、期を同じくして東日本大震災が起きました。地震、津波、原子力発電所事故による未曾有の大被害が我々の日常生活を一変させ、今なお放射能汚染問題は風評被害も含めて栃木県にも及んでいます。さらには経済成長の減速や少子高齢化社会の加速など、私たちが抱える問題も根深く、将来に対する不安な材料を多々抱えています。世界に眼を向けてみても、ギリシャやイタリアの金融危機、アラブの民主化など、大きな社会変動が生じています。

こうした変化の中で、文部科学省の学習指導要領が改正されて授業時間が増えたり、教育基本法に家庭教育に関する文言が盛り込まれたりするなど、子どもを取り巻く環境をより一層充実させる施策の整備が進められているところです。

これらの時代背景を踏まえて、平成２３年度社会教育委員の会議では、中学生・保護者・子ども会育成会関係者・自治会長を対象として調査研究を実施し、その結果を分析・考察しました。東日本大震災以来、絆の大切さや尊さが再確認されているところですが、答申書作成の過程で行政職員と社会教育委員の皆様との間にも、温かな思いやりや友情、信頼関係が生まれました。

この答申書が、中学生の社会参画の推進や、社会の変化に対応できる力（生きる力）の育成を図っていく上での重要な提言として、今後の壬生町の教育行政に大いに役立てていただけますよう、切にお願いいたします。

平成２４年２月８日

壬生町社会教育委員の会議
委員長　福田　静江

ワールド・カフェ形式での協議［アイディアの創出］　平成２３年６月２７日　壬生町役場正庁